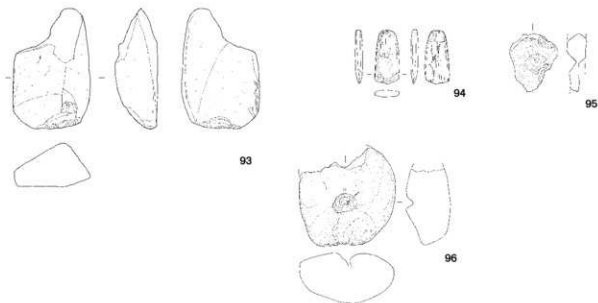
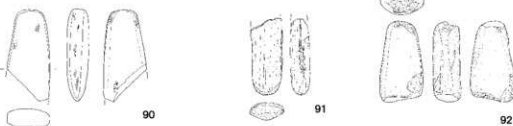
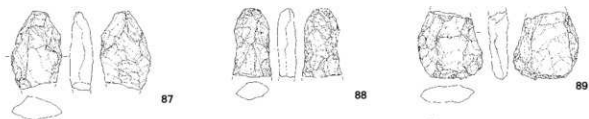
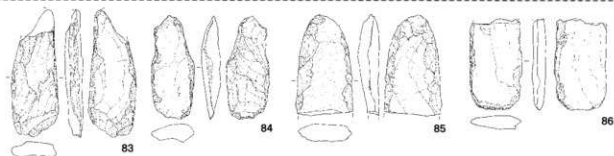
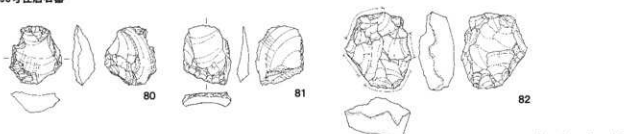


第192図 東台遺跡98号住居跡出土土器③ (1/4)

98号住居石器



第193図 東台遺跡98号住居跡出土石器 (1/4、2/3)

13は地文条線のみの胴部片。

14は胴上部の張る深鉢で地文縄文の上に隆帯で直下懸垂文と細い蛇行文を6単位配す。15と16は地文捻糸文で、16は胴部につなぎ文を沈線でつなぐ。17-19は区画文と渦巻文を口縁文様帯とし、18は磨消懸垂文をもち、19は地文条線。20と21は地文捻糸文で連弧文をもつ。22-25は地文条線で連弧文・沈線の垂下文をもち、25はミニチュアである。26は地文捻糸に沈線による蛇行文を加える。27は突出上面の渦巻文周辺を刺突する。30-33は深鉢底部で、33はミニチュア精製土器である。17-33は加曾利EⅡ式。

34は押引文列をもつ浅鉢で勝坂Ⅰ式。35と36は押引波状文をもち胎土に金雲母をもつ阿玉台Ⅱ式。37-46は幅広押引文と三角押文を基調とする類。47-52と54は筒形深鉢で爪形文と三叉文が著しい。55-57は深鉢の把手で隆帯に刻目文をいれる。58-72は口縁が彫らみ胴部が筒形となる深鉢で、隆帯で楕円形区画を連続させる特徴があり、区画内は沈線列で隆帯上には爪形刻目が入り、この上下は斜縄文の地文のみである。73は沈線列の著しい浅鉢。74は前に突出する把手。75は無文口縁の浅鉢で文様帯は沈線列を楕円形区画で囲む。76は無文の把手状口縁部。77はミニチュアの深鉢。78は地文縄文の、79は無文胴部片を側面調整した土製円板である。47-76は勝坂Ⅲ式（第Ⅴ様式）である。

(3) 集石土坑

98号住居跡の覆土内に1基検出した。住居跡の床面を壊して構築している。

【出土土器】（第195図上1-7）

1は隆帯裾に爪形文を入れる勝坂Ⅲ式。2は大深鉢の口縁部文様帯で2本組み隆帯による区画文をつくる。3は縄文を4は捻糸文を地文とし沈線で懸垂文をつくる。5は沈線の垂下文をもつ底部。6は沈線で肋骨状文をつくる曾利Ⅳ式。

(4) 土坑

土坑2基を検出した。土坑1は83号住居跡の東側に隣接する。土坑2は83号住居跡内で検出した。

第87表 東台遺跡第46地点土坑一覧表

(単位:cm)

	平面形態	確認面	底面	深さ	備考
土坑1	円形	116×114	74×70	92	土器多量出土
土坑2	楕円形	104×74	86×54	17	83号住居内

【土坑1出土土器】（第195図下1-39）

1は波頭に近い口縁で区画内側に2列の押引文を入れ押し引きによる波文をもつ。2は三角隆帯によるクラック状懸垂文をもち、底面には植物の圧痕がある。1と2の胎土には金雲母を多く含む。共に阿玉台Ⅱ式。

3は区画内に連続爪形文と半月状刺突を入れる蓮華文をもつ。4-6は口縁に大把手をもち隆帯上に連続爪形文、不定形区画内に三叉文と沈線列をもつ。7-9は隆帯上に爪形文をもち、文様帯は縦長化した区画内を沈線列と三叉文で埋める類で頸部文様帯をもつ。10はこの類の無文口縁部。11-17は4-9より小さい深鉢の胴部文様帯と素文帯部分である。15は14と同類で円形刺突文が加わる。16-17は同一個体である可能性が高い。18は7と同巧の文様をもつ。3は勝坂Ⅳ様式、4-18は勝坂Ⅴ様式であろう。19は大深鉢で口唇にはC字状爪形文、幅広押引文、三角押文がセットになる厚さ2cmの大形口縁部片。20は山形把手頂が扇形に突出し沈線による波形を描き胎土に金雲母をもつ阿玉台Ⅱ式新相のもの。21と22は幅広押引文をもつ類で勝坂Ⅳ様式。23-26はラフな沈線列の土器で勝坂式末期。

27は無文口縁で胎土に白色細砂粒を含む。28は胎土に金雲母をもつ素口縁。29は素文帯下にLR縄文が全面に施文される。30はRL縄文を全面に施文する胴下部。31は深鉢底部で、32は浅鉢底部。

33は波状口縁下に前に突出した凸帯と区画隆帯をもつ。34は口縁文様帯片横位施文の捻糸と貼付隆帯が特徴。35は区画文を沈線列で埋める。36と37は櫛状条線を地文とし、波頭に丸味のある連弧文土器。38と39は櫛状条線を地文とし、半載管状工具で連弧文と蛇行懸垂文を描く。33-34は加曾利EⅠ式。36-39は加曾利EⅡ式。1号土坑土器は90-95%が勝坂Ⅳ・勝坂Ⅴ様式で83号住居の遺物組成に近い。

第88表 東台遺跡第46地点集石一覧表

(単位:cm・g)

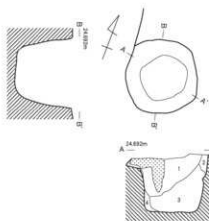
No.	平面形態	土坑確認面	底面	深さ	縦範囲	総数		赤化		定形礫(%)		備考			
						個数	重量	個数比	重量比	個数比	重量比				
楕円形	76×58	30×21	18	50×38	117	9550	8	1880	6.8%	19.7%	12	2320	10.3%	24.3%	

第89表 東台遺跡第46地点出土石器一覧

(単位:cm・g)

遺構	No.	種別・器種	口径・長さ	底径・幅	器高・厚	重量	技法/文様/その他	推定生産地	推定年代	残存・備考
83号住居	26	ナイフ	2.2	1.4	0.7	1.9		黒曜石	縄文時代	No.8
83号住居	27	打製石斧	6.8	4.7	2.6	91.6		頁岩	縄文時代	No.1
83号住居	28	打製石斧	8.7	5.6	1.9	122.9		砂岩	縄文時代	No.15
98号住居	80	楔形石器	2.3	2.0	0.9	2.8		黒曜石	縄文時代	No.231
98号住居	81	調整削片	2.3	2.0	0.6	2.0		黒曜石	縄文時代	No.1
98号住居	82	火打石	3.0	2.8	1.5	12.8		チャート	縄文時代	
98号住居	83	打製石斧	13.8	4.8	1.9	154.1		緑泥石片岩	縄文時代	
98号住居	84	打製石斧	10.6	4.9	2.2	113.9		砂岩	縄文時代	No.32
98号住居	85	打製石斧	10.1	5.9	2.3	160.7		砂岩	縄文時代	
98号住居	86	打製石斧	9.5	5.5	1.4	115.3		緑泥石片岩	縄文時代	No.26
98号住居	87	打製石斧	8.2	5.3	2.5	117.3		ホルンフェルス	縄文時代	
98号住居	88	打製石斧	7.6	4.3	2.1	81.4		ホルンフェルス	縄文時代	
98号住居	89	打製石斧	7.4	7.2	2.3	130.0		珉質細粒砂岩	縄文時代	
98号住居	90	磨製石斧	9.2	4.2	2.1	144.2		珉紋岩	縄文時代	No.246
98号住居	91	たたき石	9.6	3.2	2.0	80.1		片岩	縄文時代	No.57
98号住居	92	たたき石	8.8	4.5	2.9	185.8		砂岩	縄文時代	No.82
98号住居	93	打製石斧	11.8	7.4	4.0	365.8		砂岩	縄文時代	No.64
98号住居	94	磨製石斧	5.6	2.6	0.8	21.9		粘板岩	縄文時代	
98号住居	95	くぼみ石	6.2	5.2	2.1	53.1		緑泥石片岩	縄文時代	No.97
98号住居	96	くぼみ石	11.2	10.8	5.0	803.3		砂岩	縄文時代	No.243
集石2	7	磨石?	12.0	8.7	4.1	700.1		閃緑岩	縄文時代	No.1

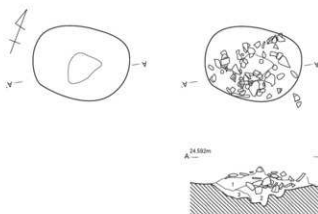
土坑1



土坑1

1. 黒褐色土 締り強、粘性有、ローム粒(5mm以下)多量、炭化物(5mm以下)極少量
2. 黒褐色土 締り強、粘性有、シニ状ローム土多量、ローム粒(5mm以下)少量、腐層土中、遺物少量含む
3. 黒褐色土 締り有、粘性有、遺物・礫多量、ローム塊(5~15mm)、ローム粒(5mm以下)少量、炭化物(5mm以下)極少量
4. 黒褐色土 締り強、粘性有、シニ状ローム塊多量

集石2

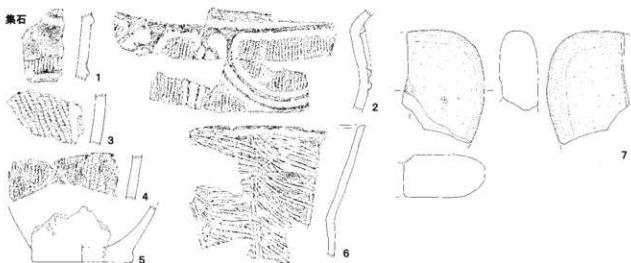


98号住居 集石2

1. 黒褐色土 締り有、粘性有、粒状ローム粒(1mm以下)中多量
2. 黒褐色土 締り有、粘性有、1層上層土中、ローム塊土(2mm以下)極少量、下部凹内にローム粒(2mm以下)多量
3. 黒褐色土 締り有、粘性有、ローム粒(1mm以下)多量、炭化物(20mm中)中多量、炭土(1mm以下)極少量

第194図 東台遺跡第46地点土坑(1/60) 集石1~4(1/30)

集石



土坑



第195図 東台遺跡第46地点土坑・集石出土土器・石器 (1/4)

第Ⅲ部 まとめ

第1章 2006年度の調査について

2006(平成18)年度は、52件の試掘調査を行い、うち8件が個人住宅建設に伴う本調査、1件が公共工事に伴う本調査、9件が民間開発に伴う本調査に移行した。その他、10件の工事立会を行った。工事立会を除いた開発面積60,976㎡のうち21,727㎡を調査したことになる。前年度と比較すると面積は3倍近くに増加している。新設小学校建設に伴う調査が増加分の大きな比重を占めているが、翌年度に調査が継続している面積(西遺跡1地点の3,000㎡)も含まれているので、実質の調査面積はやや少ないのであるが、それでも近年中では発掘の多い年であった。

開発の内容は、相続に伴い建売住宅や宅地開発する例が多かった。基礎工事が遺構面に影響を及ぼさないため宅地部分は保存し、道路部分や削り部分を発掘する等、部分的な発掘であった。

【旧石器時代の調査】今年度は4ヶ所で旧石器時代の遺構を検出した。鶴ヶ舞遺跡は福岡江川左岸の斜面に位置し、7地点と今回の10地点の2ヶ所で礫群を検出している。川から100m離れ、現谷底とは3～4mの比高差がある。

江川南遺跡は福岡江川を挟んで鶴ヶ舞遺跡の対岸の右岸斜面地に位置する。22地点は川から50m、23地点は20mの近距離にあり、現谷底とは1～2mの比高差がある。今までに2・11・19地点と合わせ5ヶ所で旧石器時代の礫群・石器群を検出しており、東西150m、南北120mの広範囲に分布する。いずれの個所でも礫群は径1～2.5mの比較的小規模なものであり、5～10mの範囲に2,3基の礫群がまとまって分布する。

一方、石器群は径5m以上の広い範囲に分布する場合が多いが、22・23地点では石器点数が少なく、礫群に付随するような小規模なものであった。

東台遺跡第45地点では長11.4cm、幅6.9cm、厚5.5cm重さ560gもある黒曜石の石核が出土した。石器群は立川ローム第V層から第VI層にかけて3か所検出したが、石核はその石器群の南西端で検出した。5cm前後の縦長剥片を剥離していった残核で、石器群からは同

じような石質の縦長剥片やナイフ形石器を検出したが、今のところ接合には至っていない。

今後、石器・礫ともに遺構間の接合を試み、遺構の新旧関係や集団の移動を復元できるようなデータを蓄積していきたい。

【縄文時代】早期・前期と思われる遺構には淨禅寺跡遺跡第26地点の炉穴がある。10基検出し、うち4基から早期の土器片を検出した。2～7m間隔で点在し、足場を共有するような遺構同士の重なりはない。

この他に西ノ原遺跡第135地点で1基、神明後遺跡第28地点で3基の炉穴を検出しているが、時期の確定できる遺物はない。神明後遺跡の場合、3基の炉穴が放射状に配置され、外側に焼土面を持つという特徴があるが、中心部は風倒木痕により攪乱される。

中期では6ヶ所の調査地点で住居跡を検出した。

亀居遺跡第61地点では中期前半、阿玉台Ⅱ式期古相の住居跡を検出した。阿玉台1b式期からⅡ式期と推測する本遺跡の集落時期の範疇に入る。

江川南遺跡第23地点では中期前半、新道式期の住居跡を新たに1軒検出した。同地点は第1地点として調査済みで(1977年)、勝坂Ⅰ式期の住居跡を1軒検出している。亀居遺跡、江川南遺跡は福岡江川の主流と下流に位置し、炉体土器を伴う住居構造や、住居に重複がないことが指摘されている。(今井・坪田本書)

西ノ原遺跡第135地点では中期後半、加曾利EⅠ新式の住居跡を検出した。西ノ原遺跡の縄文集落は阿玉台1b式期から加曾利EⅢ式期まで継続し、主流から下流へ向かって集落の中心が移動している事が看取できる。(桜井2005)加曾利EⅠ前期の集落は、南側へ偏重する傾向を見せており、183号住居跡は当該期集落の南西端に位置する。加曾利EⅡ式期の集落はさらに西へ拡張していく。等高線を詳しく見ると、西ノ原遺跡の南側に東流する浅い谷が存在することがわかる。(第119図参照)縄文時代中期に流水があったかどうかは不明であるが、住居の配置はこの浅い谷に沿ったラインが看取できる。

神明後遺跡第28地点では中期後半、加曾利EⅠ新期からEⅢ期の住居跡11軒を検出した。EⅠ新式期の住居跡は4軒で、18号・22号住居跡は斜面地に作られているため、台地側の壁が高く1mを超える深さがある。両住居とも多量の土器が廃棄されていた。床直上の土器もあるが、レンズ堆積した土の上に土器を廃棄して行った、いわゆる吹上パターンを示す。特に22号住居跡は完形に近い状態の土器が多く、出土土器は阿玉台Ⅱ式から加曾利EⅠ新式期までで、EⅠ古式からEⅠ新式古相の土器が多い。18号住居跡の場合は殆んどがEⅠ新式である。17号住居跡も覆土出土の土器が多く、EⅠ新式からEⅡ式である。また、内面に文様が塗彩された浅鉢が出土した。

加曾利EⅡ式期は5軒。20号住居跡では、特殊な出土状況がある。石囲い炉を中心とした三角形の頂点に小さな炉とピットがあり、ピットの上に深鉢が1個正位の状態に浅く埋っていた。底辺に位置する2基のピットの脇には伏せた状態で深鉢が2個、その中間に石が2列平行に並んだ状態で出土した。中心にある石囲い炉の中にも石が置かれており、かなり意図的な配置を伺わせる。なお、土器は全て胴下半を欠く。

また、20号住居の配石、炉、埋壺の軸線を延長すると屋外埋壺1と2の中間を通る。方位はN-42°-1Wで、加曾利EⅠ式期の17号、18号、22号住居跡の主軸方位と近似するが、EⅡ式期の16号、19号、25号住居跡の主軸とはやや異なる。

東台遺跡では第46地点で2軒、48地点で3軒の住居跡を検出した。98号住居跡は加曾利EⅡ式期の住居で覆土内に集石土坑があった。

【古代】奈良・平安時代の住居跡を7軒確認し、うち3軒を調査した。松山遺跡第40地点H33号住居跡は8世紀後半、奈良時代の住居跡で、北壁中央に竈が設けられている。

神明後遺跡第28地点のH2号住居跡は9世紀前半、平安時代初頭の住居跡で北壁中央に竈が設けられている。竈左側の壁際から、須恵器坏を小ぶりにしたような土師器坏が8枚まとまって出土した。内面と口縁部を横撫でし、体部下半から底部にかけて剝りする。器形は同時期の器としては特異だが、整形や含有物は8世紀代の土師器坏と類似する。8枚全てに煤が付着

していることから灯火具として使用したと思われる、灯火具専用で作られた土師器の可能性もある。また、須恵器坏も6点に煤の付着が認められたが、割れ口にも煤が付着する底部破片の坏(第179図No9)は、「芯押し」として再利用した可能性がある。(註1)

一方、頸部を打ち欠いた須恵器壺の内面の2/3以上に煤が多量に付着していた。灯火具の多さを考慮すると、この壺の使用方法にも注意が必要である。

また「十刀」と底部に墨書された須恵器坏も検出している。

川崎遺跡第21地点のH51号住居跡は9世紀後半・平安時代の住居跡で、東壁に竈が設けられている。竈の北側(左側)は張出しており、竈南側(右側)は棚状施設と思われる。

【中世】駒林遺跡第1・2地点、神明後遺跡第28地点で時期不明の溝・堀跡を検出した。覆土のサンプルからテフラ分析を行った結果、駒林遺跡第1地点と神明後遺跡第28地点の堀跡は12世紀初頭以降であった可能性が指摘された。(附編 自然化学分析参照)

特に駒林遺跡第1地点の場合は、溝跡の覆土中に茶毘跡が構築されており、茶毘跡1で検出した炭化材の年代測定を行ったところ、中世(AD1316-1606)の結果を得た。溝跡は西側で北方向へ直角に曲がり、第2地点の溝1や、平成16年度試掘、平成9年度試掘③で確認した溝5に連なると思われる。また、平成9年度試掘①、②で確認した東西方向の溝跡や、第3地点の溝1が同一遺構であった場合は、1辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能であるが、方形内で館跡に伴うような遺構の検出はまだない。

松山遺跡第41地点は試掘調査で中世末から近世初頭の溝を検出し、遺跡範囲の拡大となった。溝跡は並行して2本検出し、遺跡の側溝と思われる。『新編武蔵野風土記稿』によれば、この地は松平信綱が川越藩主のときに開発され、「福岡新田」として1648(慶安元)年の検地で福岡村から分村した。なお、「福岡」の名は「北条氏所領役帳」に載っており、戦国期には村落が成立していた。(木村他2000)戦国以降近世初頭に行われた新田開発に伴う遺構の可能性もあり、遺跡の範囲もより東へ拡大する可能性を秘めている。今後注意が必要である。

【近世】駒林遺跡第3地点で検出した大型土坑は、近世遺物を伴う。採土坑の可能性がある。

本村遺跡第117地点の場所は「権現様」「久田跡（きゅうでんあと）」と地元の人に呼ばれており、明治5年の「東原及び市沢公園」でも「寺社跡」になっている。また、新井家文書の「神社・仏閣絵図」に「久田社」と描かれた個所があり、位置的にみて今回調査した場所であったと思われる。しかし、明治末年の神社合祀政策により「久田神社」は「水川神社（根上神社）」に合祀され、以来、跡地は畑となった。

今回の調査で検出した溝跡で囲われた区画地は、明治五年の公園にある寺社跡と位置・形状が一致している。旧道（平成元年に区画整理で廃道）はこの場所でクランク状に曲がるが、旧道と接する部分は溝がなく、幅5mの間口が開いており、間口の北側には柵列跡や炭化した木材が出土した。また、間口の東側から区画地の南へ向かって幅1mほどの硬化面が続く。南側は地山が小高く残っており、社殿の場所であったとすれば、硬化面は参道の可能性がある。

明治年間に描かれた「神社仏閣絵図」によれば、久田社は北側に鳥居、南側に社殿が描かれる。また、明治五年九月の「社地境内取調帳」に掲載された絵図では、左下隅に鳥居があり、右上奥に本社が描かれている。「神社仏閣絵図」の向き（鳥居を北、社殿を南）

にすれば、調査で検出した道状の硬化面の向きと小高い区画の位置関係とも合致する。

明治三年十二月の「大井町神社書上帳」によれば、

久田神社	但シ式外
祭神	不相分
勧進年期	不相分神位等無御座候
社間数	間口六尺
奥行	五尺五寸
社前建物	木鳥居六尺
祭日	三月十五日
社地間数	間口五間
奥行	九間
地所	古菜通沿
草	無御座候

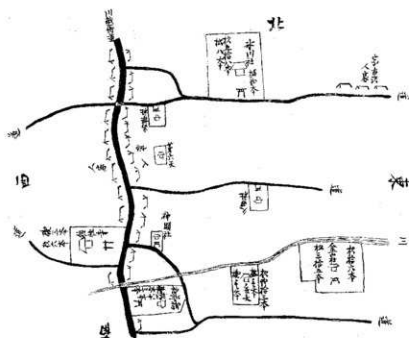
とある。溝で囲われた内寸は12×21.5mで五間九間よりは若干広いが、比率は同じである。

以上から本地点は久田神社跡地であり、調査により社地を取り囲む溝を検出することができた。(高崎直成)

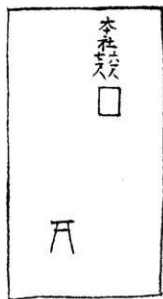
註(1)「古代入間を考える会」坂野千登勢氏の御教示による。

引用・参考文献

- 本村立彦・工藤安・橋本鶴人2000「IV近世第1章二村の成立」
 「上福岡市史通史編上巻」上福岡市教育委員会
 桜井聖悟2005「まとめと問題点」『西ノ原遺跡Ⅳ 東台遺跡Ⅴ』
 埼玉県大井町遺跡調査会
 坂野千登勢2005「再利用された土器群の考察」『若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅵ』坂戸市教育委員会
 大井町教育委員会「大井町神社書上帳」『大井町史資料編Ⅲ-1近代』7頁
 「神社仏閣絵図」(新井家文書2-14170)
 「社地境内取調帳」(大井一区所蔵文書一-106)



第196図 神社仏閣絵図 (50%縮小)



第197図 社地境内取調帳 (久田神社境内)

第2章 神明後遺跡出土の縄文時代中期塗彩土器について

I はじめに

神明後遺跡から赤色塗彩によって文様が描かれた土器が出土した。縄文時代中期の彩色された浅鉢については近年集成が図られており(中出2005)、ともすれば見逃しがちな塗彩土器について注意が促され、類例も増えてきたところである。今回、塗彩文様のある土器を報告するにあたり、埼玉県内出土の縄文時代中期の塗彩された土器について簡単な集成を図り、その上で塗彩文様のある土器の位置づけを行ってみたい。

II 塗彩のある土器

市内では、塗彩された縄文土器をいくつか検出している。最古の土器は縄文時代前期の諸磯b式で、鷲森遺跡で2点検出した。続いて、中期前葉猪沢式の浅鉢2点、新道式の浅鉢2点を亀居遺跡で、勝坂末の浅鉢は西ノ原遺跡の住居3軒(16・17・60号住居)と東台遺跡の住居2軒(92・147号住居)で、加曾利E I新式では西ノ原遺跡2軒(77・176号住居)、神明後遺跡5軒(6・17・18・21・22号住居、集石7)で浅鉢と有孔罎付土器。加曾利E IIは西ノ原遺跡3軒(65・66・68号住居)、東台遺跡1軒(45号住居)で浅鉢と有孔罎付土器を検出している。

西ノ原遺跡内で塗彩土器が多く出土した住居は60・65・66・176号住居である。60号住居は覆土中層に完形土器を含めて多量の遺物が出土したが、土器の中に異系統(大木8a新相)が多いという特徴をもつ。66・176号の位置する一帯は、遺跡内で最も住居が密集する場所で、蛇紋岩製の小形磨製石斧などがまぎって出土した。

神明後遺跡の18・22号住居も土器の一括大量投棄があり、22号住居には異系統の土器が多く、西ノ原60号住居と似た特徴をもつ。

土器出土量の多い住居ゆえに塗彩土器が多いという可能性もあるが、塗彩土器の出土分布には注意する必要がある。

県内(市内を含めて)出土の縄文時代中期の塗彩土器は35遺跡(註1)で検出しているが、勝坂末から加曾利Eに集中する。(第199図及び第91表参照)

第90表 埼玉県内出土塗彩土器集計表

塗彩部位 器種	内外 面	外面 のみ	内面 のみ	合計	a	b	c	d	e
浅鉢・鉢	48	32	45	125	27	28	4	3	17
壺	2	3		5	2				4
瓢箪注口	3	1		4	4				3
有孔罎付	3	9	4	16	1				
甕			1	1					
土台		1		1					
深鉢		1	2	3		1			
その他	4	3	1	8	4			6	1
合計	60	50	53	163	38	29	4	16	18

県内出土の塗彩土器は、第90表が示すとおり、浅鉢が大半を占め、次に有孔罎付土器が多い。両者には無文と隆帯・沈線などの文様を持つ土器が存在する。塗彩部位によって類別すると以下のようになる。

- 全面
- 口縁部
- 隆帯文様上
- 沈線・微隆帯等に囲われた文様帯内。
- 塗彩によって文様を描く

以上のうちb口縁部はcやeとの組み合わせ、すなわち口縁部文様帯に塗彩されることが多く、eの場合は内外面に塗彩文様のある場合と、内外面どちらかが文様で残りは全面塗彩等の場合がある。また、口縁部の塗彩は屈曲部分で区切られることが多い。

しかし、塗彩は土器の一部で確認できることが多く、ほとんどは剥離していると思われる。報告では「一部に痕跡」と記述していることが多い。実際、市内出土の遺物も一部の痕跡から塗彩を判断できるに過ぎない。また、隆帯上に塗彩する土器も一部の痕跡であることから、隆帯以外の場所も塗彩している可能性も残るわけである。特に破片の場合は文様を描いたものか、全面塗彩なのかの判別は困難である。

以上不備な点が多々ある上での集成であるが、あえて県内の傾向を示すと以下のようになる。

- 塗彩される土器は浅鉢、特に大・中型の浅鉢が多い。
- 勝坂末から加曾利E IIIにかけて、隆帯文様を持つ浅鉢が塗彩される。特に隆帯上に塗彩する例がある。
- 加曾利E IからE IIにかけて塗彩文様の浅鉢が確認できる。特にE I新に多い。

●加曾利EⅠ新以降の有孔罅付土器に塗彩が確認できる。特にEⅠ・Ⅱには浅鉢同様無文の土器が存在する。

●加曾利EⅢ以降、沈線や微隆起線で塗彩範囲を区画する例が増える。

Ⅲ 塗彩によって文様の描かれた土器

神明後遺跡17号住居跡から出土した浅鉢（第137図No12）は、赤色顔料（註2）で文様が描かれていた。文様は懸垂文と半円形の周囲を2本の細い併行線で囲うもので、土器の半分以上が欠損しているため確実ではないが、おそらく四分割して文様が配置されていると思われる。基本的に加曾利EⅡ式土器の文様構成と同じである。口縁部は内外面とも赤色塗彩されていた痕跡がある。特に内面の一部は、黒もしくは黒色顔料の上に赤色顔料が塗られており、細かくひび割れていた。

神明後遺跡22号住居跡出土の浅鉢（第161図No33）内面底には、2本の円弧文様が赤色塗彩されている。下地として黒色塗彩の痕跡がある。

西ノ原遺跡第128地点では176号住居で3点、トレンチで1点、文様のある破片が出土した。特にNo26は「U」字形に黒色顔料と赤色顔料で塗彩しており、黒い縁取りがなされているように見える明確な文様である。

県内で見つかった塗彩文様のある縄文中期の浅鉢は皆見の限りでは以外と少ない。

富士見市針ヶ谷北通遺跡2号住居からは加曾利EⅠ新式期の見事な文様が描かれた浅鉢が出土している。内面は渦巻状と弧状の文様、外面は二又、三又の放射状に赤彩されている。

所沢市膳棚遺跡6号住居では内面に渦巻文様が黒色塗彩された浅鉢破片、12号住居では内面に渦巻状と弧状文様が赤色塗彩された浅鉢破片が検出されている。

飯能市堂前遺跡では遺構外ながら外面に渦巻き文様を赤色塗彩した浅鉢破片が出土している。

日高市宿東遺跡では、3号住居跡で内外面に文様を持つ浅鉢破片が出土しているが、赤色塗彩と黒色塗彩で文様が塗り分けられている。46号住居跡で内面に文様が赤色塗彩された浅鉢破片が出土する。

毛呂山町まます上遺跡では外面に楕円区画文様が赤色塗彩された浅鉢破片が出土している。

さいたま市寿能遺跡では縄文時代中期から晩期までの塗彩土器が報告されているが、報告文でI期とされる中期後葉から後期初頭の土器は19点が掲載されている。加曾利EⅢ・Ⅳ、称名寺の土器は、微隆起線や沈線などで囲われた中を塗彩しているが、加曾利EⅠ～Ⅱの土器は文様区画内を塗彩したものの他に、赤色で内外面に円形が渦巻の文様を描き、「赤漆塗の部分の他に、黒漆塗（もしくは生漆塗）の部分認められ」「黒色は下地としてもしくは下地のごとく用いられ」ていた。I期の赤色顔料は分析の結果全てベンガラであった。ただ、漆膜は分析の結果ではなく観察結果の判断である。（成瀬1984）

深谷市深谷町遺跡出土の土器も加曾利EⅢ・Ⅳで、微隆起線で囲われた中を塗彩しているが、1点だけ弧状の帯が内面に描かれた条線文土器が出土している。

おそらくこの他にも塗彩された縄文中期の土器は存在すると思われる。県内の報告書を全て調べていないなどの不備もあるが、塗彩されていても剥離していたり、残っていても塗彩が文様なのか一面なのかは不明である。

数少ない県内出土の塗彩文様のある土器をまとめるると以下ようになる。

- 器種は浅鉢。
- 文様のモチーフは渦巻き・円弧（連弧、楕円）が主。
- 文様は内面のみ・外面のみ・内外両面に描かれる。ただし破片や顔料剥落などの理由で不明の場合もある。
- 塗彩は赤色のみ・黒色のみ・赤黒二色（黒色下地に赤色塗彩を含む）
- 時期は加曾利EⅠ～EⅡ期に多い。（註3）

Ⅳ まとめ

明確な塗彩はともかく、ほとんどは赤色が僅かに残っていたり、色がくすんで塗彩かどうかの判断がつかぬものもある。赤色塗彩の場合は、外面に斑もしくは放射状に残る橙色や茶褐色の痕跡が、焼成ムラによるものか塗彩なのか。また、黒色塗彩についても同様に焼成時の黒斑かどうかの判断が難しく、黒色塗彩といった認識もなく取り扱われている可能性が高い。

仔細に観察すれば、塗彩土器の比率が高まる事例もあり(尾形2007)、中山氏が指摘するとおり、無文の浅鉢が塗彩されている可能性が高いとすれば、塗彩土器の比率はもっと高くなる。今後は塗彩の有無をよく確認するとともに、無文浅鉢=塗彩土器の可能性を考慮し、浅鉢の出土量や出土分布を把握していく必要がある。浅鉢の出土量や分布の特徴があるかないかにより、浅鉢が特殊なものか普遍的なものかの性格も見えてこよう。

一方塗彩文様のある土器は、塗彩が文様であるかどうかも不明な土器片が多いと思われるので、明言はできないが、文様のモチーフは県外(関東地方)を見ても渦巻き・円弧・鋸歯が主体で、神明後遺跡17号住居跡出土のモチーフは珍しいといえる。

今後は県内の報告を仔細にあたり資料を蓄積したうえで塗彩土器と塗彩文様について再度検討を試みたい。

最後になったが、日本考古学協会の今井亮氏には本稿をまとめるに当たり数多くの御教示をいただいた。また、埼玉県による調査(教育委員会・遺跡調査会・埋藏文化財事業団)で出土した塗彩土器を検索するにあたり、事業団の栗岡潤氏に多大なるご尽力をいただいた。事業団の大屋道則氏には顔料の分析にあたって便宜いただいた。記して謝意を表する次第である。

(高崎直成)

註

- 1) 県内市町村の報告についてはすべてをあたる時間がなかったため、入間地区と北足立郡西部(志木市、朝霞市、新座市、和光市)のみの集成である。また、記述の凡格とし等もあると思われるので、機会を見え県内の再集成を行ってみた。
- 2) 埼玉県立埋藏文化財センターで、塗彩面を蛍光X線で分析した結果、水銀の成分は検出されていないので、顔料はおそらくベンガラ(酸化第二鉄)と思われる。
- 3) 「中山2005」においても、塗彩による文様描写のある浅鉢は、8b期(勝坂Ⅱ)に現れ、10期(加曾利E1)が最盛で11期(加曾利E2)まで継承するとある。

引用・参考文献

青柳美雪2007 「縄文時代中期の浅鉢について」志木市遺跡調査報告第12集「中道遺跡第65地点」志木市遺跡調査会
中山真治2005 「縄文時代中期の彩色された浅鉢についての覚え書きー関東地方西南部の中期集落資料を中心にー」『東京考古23』東京考古談話会
成瀬正和1984 「赤色塗彩土器・漆塗土器・漆液容器についてー赤色顔料の科学的分析結果などからー」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』人工遺物・総括編一埼玉県教育委員会

集成一覧掲載報告書

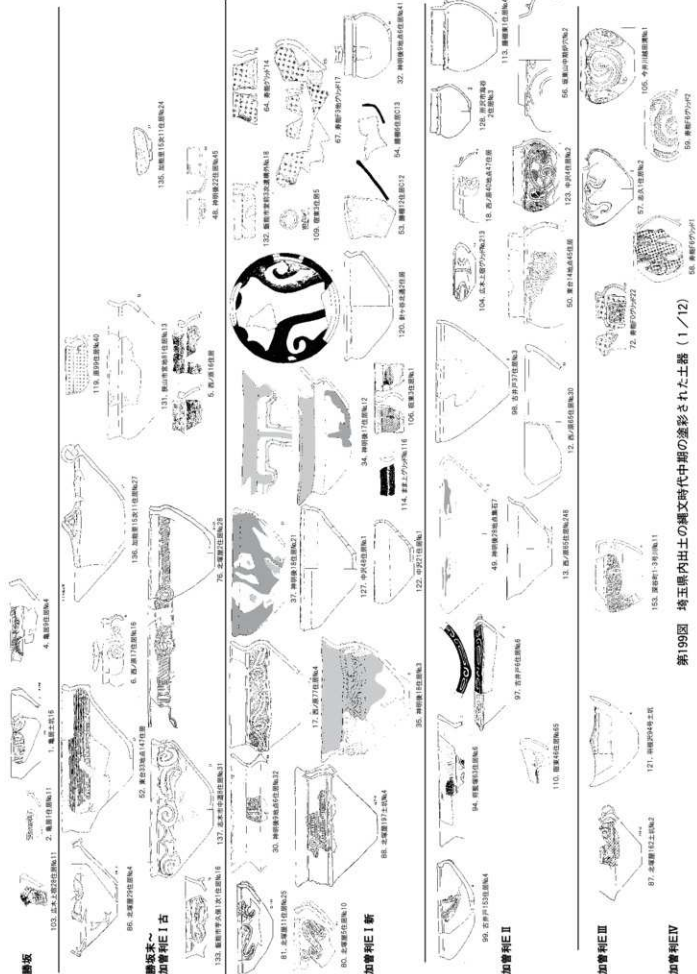
1	大井町遺跡調査会1998大井町遺跡調査報告第8集「亀居遺跡」
2	大井町遺跡調査会1992大井町遺跡調査報告第3集「亀居遺跡(第20地点)本丸遺跡(第17・18地点)」
3	大井町遺跡調査会1996大井町遺跡調査報告第6集「西ノ原遺跡」
4	大井町教育委員会1990文化財調査報告第20集「東部遺跡群Ⅰ」
5	大井町教育委員会2003文化財調査報告第34集「町内遺跡群Ⅰ」
6	大井町遺跡調査会2008大井町遺跡調査報告第18集「西ノ原遺跡」
7	大井町教育委員会2000文化財調査報告第31集「町内遺跡群Ⅱ」
8	ふじみ野市教育委員会2007ふじみ野市埋藏文化財調査報告第4集「町内遺跡群3」
9	大井町教育委員会1989文化財調査報告第18集「東部遺跡群Ⅱ」
10	大井町教育委員会2005文化財調査報告第36集「町内遺跡群Ⅱ」
11	大井町遺跡調査会2005大井町遺跡調査報告第17集「西ノ原遺跡Ⅰ・東部遺跡Ⅰ」
12	埼玉大学考古学研究会1970(昭和45)「藤原」
13	埼玉県教育委員会1973埼玉県遺跡調査報告書第1集「岩の上・菓子山」
14	埼玉県教育委員会1973埼玉県遺跡調査報告書第2集「坂東」
15	埼玉県教育委員会1976埼玉県遺跡調査報告書第31集「志久遺跡」
16	埼玉県教育委員会1984「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書」人工遺物・総括編一
17	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1982第8集「下市原」
18	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1985第48集「北原Ⅱ」
19	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1986第63集「野坂」
20	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1987第66集「北ノ八幡谷・相野谷」
21	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1989第75集「吉井」
22	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1993第125集「中道遺跡」
23	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1993第131集「谷ノ内・反田・下向山」
24	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1997第185集「坂上・上宿遺跡」
25	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1997第191集「今井川越田遺跡」
26	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1998第197集「宿東遺跡」
27	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1999第214集「宮北V遺跡」
28	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団1999第215集「穂積東遺跡」
29	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団2001第242集「まじ上遺跡」
30	財団法人埼玉埋藏文化財調査事業団2004第295集「原ノ戸崎宮・美阿立根・相野谷・向原・北」
31	富士見市遺跡調査会1984富士見市遺跡調査報告第23集「針ヶ谷遺跡」
32	富士見市教育委員会1992富士見市文化財報告第42集「富士見市遺跡群Ⅱ」
33	富士見市遺跡調査会1998富士見市遺跡調査報告第49集「中沢遺跡第2・3・10地点」
34	富士見市遺跡調査会1999富士見市遺跡調査報告第52集「勝原遺跡群」
35	富士見市教育委員会2000富士見市文化財報告第52集「富士見市内遺跡群」
36	所沢市教育委員会2000所沢市埋藏文化財調査報告第22集「海谷遺跡」
37	狭山市遺跡調査会1998狭山市遺跡調査報告第12集「成沢田遺跡」
38	狭山市遺跡調査会2003狭山市遺跡調査報告第13集「丸山遺跡」
39	狭山市教育委員会2007狭山市文化財調査報告第26集「宮地遺跡第6次調査」
40	飯能市教育委員会1986飯能市内遺跡発掘調査報告書3「飯能の遺跡(3)」
41	飯能市教育委員会1991「飯能の遺跡(11)」
42	飯能市遺跡調査会1992飯能市遺跡調査会発掘調査報告書7「加能里遺跡第13次調査」
43	飯能市教育委員会2001「飯能の遺跡(30)」
44	志木市遺跡調査会2007志木市遺跡調査会調査報告第12集「中道遺跡第65地点」
45	深谷市教育委員会1986埼玉県深谷市埋藏文化財発掘調査報告書第9集「深谷町遺跡」

第91表 埼玉県内出土塗彩土器一覧表

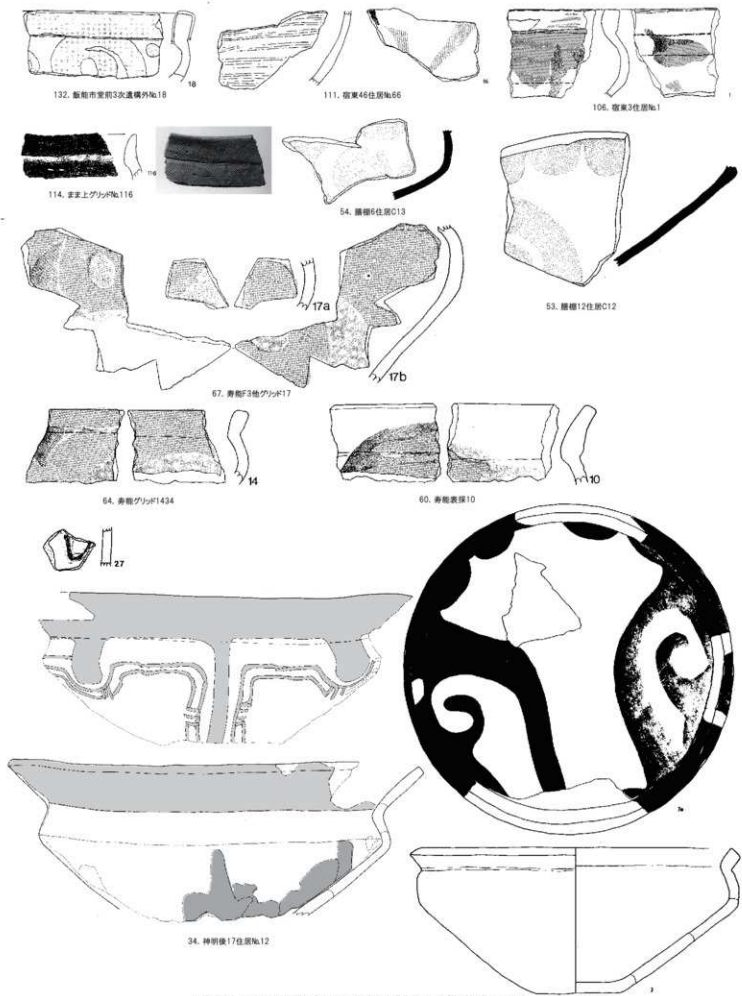
所在地	遺跡名	遺層	No.	器種	時期	塗彩範囲		備考	文献
						外	内		
1	ふじみ野町 亀田	116	4	浅鉢	縄文			3	
2	ふじみ野町 亀田	117	11	浅鉢	縄文			3	
3	ふじみ野町 亀田			浅鉢	縄文			3	
4	ふじみ野町 亀田	119	4	浅鉢	縄文			2	
5	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	35	浅鉢	縄文-ⅡA 15			2	
6	ふじみ野町 西ノ原	67号遺層	36	浅鉢	縄文			2	
7	ふじみ野町 西ノ原	62号遺層	22	浅鉢	縄文-ⅡA 15			3	
8	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	23	浅鉢	縄文-ⅡA 15			3	
9	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	217	浅鉢	縄文-ⅡA 15			1	
10	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	238	浅鉢	縄文-ⅡA 15			3	
11	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	263	浅鉢	縄文-ⅡA 15			3	
12	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	303	浅鉢	縄文			3	
13	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	268	浅鉢	縄文			3	
14	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	279	浅鉢	縄文			3	
15	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	601	浅鉢	縄文			3	特異形
16	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	602	有孔浅鉢	縄文			3	
17	ふじみ野町 西ノ原	62号遺層	4	浅鉢	縄文Ⅱ期			3	
18	ふじみ野町 西ノ原	62号遺層	3	有孔浅鉢	縄文			4	
19	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	618	浅鉢	縄文			3	
20	ふじみ野町 西ノ原	60号遺層	302	浅鉢	縄文			3	
21	ふじみ野町 西ノ原	67号遺層	26	浅鉢	縄文			3	
22	ふじみ野町 西ノ原	125号遺層	22	浅鉢	縄文			3	
23	ふじみ野町 西ノ原	126号遺層	20	浅鉢	縄文			3	
24	ふじみ野町 西ノ原	126号遺層	23.3	浅鉢	加Ⅱ期			3	
25	ふじみ野町 西ノ原	126号遺層	26.30	浅鉢	加Ⅱ期			3	
26	ふじみ野町 西ノ原	126号遺層	23.3	浅鉢	加Ⅱ期			3	
27	ふじみ野町 西ノ原	遺層外	23	浅鉢	縄文			3	
28	ふじみ野町 西ノ原	遺層外	25	浅鉢	縄文			3	
29	ふじみ野町 西ノ原	遺層外	27	浅鉢	縄文			3	
30	ふじみ野町 神明後	6号遺層	32	浅鉢	加Ⅱ期			2	
31	ふじみ野町 神明後	6号遺層	37	浅鉢	加Ⅱ期			2	
32	ふじみ野町 神明後	6号遺層	41	有孔浅鉢	加Ⅱ期			2	
33	ふじみ野町 神明後	15号遺層	23	有孔浅鉢	加Ⅱ期			3	
34	ふじみ野町 神明後	17号遺層	12	浅鉢	加Ⅱ期			3	外口・頸部と土器
35	ふじみ野町 神明後	18号遺層	3	浅鉢	加Ⅱ期			3	特異形
36	ふじみ野町 神明後	18号遺層	20	浅鉢	加Ⅱ期			3	特異形
37	ふじみ野町 神明後	18号遺層	21	浅鉢	加Ⅱ期			3	
38	ふじみ野町 神明後	18号遺層	22	浅鉢	加Ⅱ期			3	
39	ふじみ野町 神明後	18号遺層	23	浅鉢	加Ⅱ期			3	
40	ふじみ野町 神明後	18号遺層	26	有孔浅鉢	加Ⅱ期			3	
41	ふじみ野町 神明後	18号遺層	37	有孔浅鉢	加Ⅱ期			3	
42	ふじみ野町 神明後	18号遺層	6	浅鉢	加Ⅱ期			3	
43	ふじみ野町 神明後	22号遺層	28	浅鉢	加Ⅱ期			3	特異形
44	ふじみ野町 神明後	22号遺層	31	浅鉢	加Ⅱ期			3	
45	ふじみ野町 神明後	22号遺層	32	浅鉢	加Ⅱ期			3	
46	ふじみ野町 神明後	22号遺層	33	浅鉢	加Ⅱ期			3	器身下部に凹溝
47	ふじみ野町 神明後	22号遺層	35	浅鉢	加Ⅱ期			3	
48	ふじみ野町 神明後	22号遺層	43	有孔浅鉢	加Ⅱ期			3	
49	ふじみ野町 神明後	42号遺層	2	浅鉢	加Ⅱ期			3	
50	ふじみ野町 東中	6号遺層	1	有孔浅鉢	加Ⅱ期			3	
51	ふじみ野町 東中	6号遺層	1	浅鉢	縄文			3	
52	ふじみ野町 東中	167号遺層	67	浅鉢	縄文			3	
53	西宮町 東野	12号遺層	412	浅鉢	加Ⅱ期			11	器身・頸部と土器
54	西宮町 東野	6号遺層	433	浅鉢	加Ⅱ期			12	器身
55	坂戸市 岩の上	4号遺層	6	浅鉢	加Ⅱ期			13	注文
56	久利町 坂田	9号の遺層	2	浅鉢	加Ⅱ期			14	
57	伊勢町 志久	1号遺層	2	有孔浅鉢	加Ⅱ期			15	
58	さいたま市 春日部東	グロップ	1	瓶口付	加Ⅱ期			16	河越町(北)467
59	さいたま市 春日部東	グロップ	2	瓶口付	加Ⅱ期			16	
60	さいたま市 春日部東	表層	20	浅鉢	加Ⅱ期			16	赤色土層(表層)
61	さいたま市 春日部東	グロップ	11	浅鉢	加Ⅱ期			16	
62	さいたま市 春日部東	表層	13	浅鉢	加Ⅱ期			16	頸部に刻線あり
63	さいたま市 春日部東	グロップ	14	浅鉢	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
64	さいたま市 春日部東	グロップ	15	浅鉢	加Ⅱ期			16	
65	さいたま市 春日部東	表層	16	浅鉢	加Ⅱ期			16	
66	さいたま市 春日部東	グロップ	17	浅鉢	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
67	さいたま市 春日部東	グロップ	18	浅鉢	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
68	さいたま市 春日部東	グロップ	19	浅鉢	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
69	さいたま市 春日部東	グロップ	20	浅鉢	加Ⅱ期			16	沈殿区画
70	さいたま市 春日部東	グロップ	21	浅鉢	加Ⅱ期			16	
71	さいたま市 春日部東	表層	22	有孔浅鉢	加Ⅱ期			16	沈殿区画
72	さいたま市 春日部東	表層	23	瓶口付	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
73	さいたま市 春日部東	グロップ	24	瓶口付	加Ⅱ期			16	器身・頸部と土器
74	川越町 下原	139	65	浅鉢	加Ⅱ期			17	
75	菅野町 北原	2号遺層	28	浅鉢	加Ⅱ期			18	
76	菅野町 北原	2号遺層	41	浅鉢	加Ⅱ期			18	特異形と土器

所在地	遺跡名	遺層	No.	器種	時期	塗彩範囲		備考	文献
						外	内		
78	菅野町 北原	2号遺層	42	浅鉢	加Ⅱ期			18	特異形
79	菅野町 北原	2号遺層	43	浅鉢	加Ⅱ期			18	
80	菅野町 北原	2号遺層	10	浅鉢	加Ⅱ期			18	外縁部
81	菅野町 北原	11号遺層	25	浅鉢	加Ⅱ期			18	外縁部
82	菅野町 北原	18号遺層	2	台付	加Ⅱ期			18	
83	菅野町 北原	28号遺層	1	浅鉢	加Ⅱ期			18	
84	菅野町 北原	22号遺層	38	浅鉢	加Ⅱ期			18	特異形
85	菅野町 北原	28号遺層	6	浅鉢	加Ⅱ期			18	
86	菅野町 北原	29号遺層	4	浅鉢	縄文			18	外縁部
87	菅野町 北原	土102	2	浅鉢	加Ⅱ期			18	沈殿
88	菅野町 北原	土107	4	浅鉢	加Ⅱ期			18	特異形
89	菅野町 北原	土108	1	浅鉢	加Ⅱ期			18	
90	菅野町 北原	土203	6	浅鉢	加Ⅱ期			18	
91	菅野町 北原	土215	7	浅鉢	加Ⅱ期			18	
92	菅野町 北原	土231	2	浅鉢	加Ⅱ期			18	口部付
93	菅野町 北原	アグロップ	27	浅鉢	加Ⅱ期			18	外縁部
94	本庄市 押原	40号遺層	6	浅鉢	加Ⅱ期			19	外縁部
95	伊勢町 北	2号遺層	34	浅鉢	加Ⅱ期			20	
96	伊勢町 北	40号遺層	20	浅鉢	加Ⅱ期			20	
97	北本市 古瀬	40号遺層	6	浅鉢	加Ⅱ期			21	沈殿区画
98	北本市 古瀬	40号遺層	3	浅鉢	加Ⅱ期			21	口部付
99	北本市 古瀬	120号遺層	4	浅鉢	加Ⅱ期			21	口部付
100	坂戸市 中野	9号遺層	9	浅鉢	加Ⅱ期			22	
101	坂戸市 中野	表層	41	浅鉢	加Ⅱ期			22	
102	川口市 一色町	12号遺層	3	有孔浅鉢	加Ⅱ期			23	
103	東武野 法木上	28号遺層	11	浅鉢	加Ⅱ期			23	沈殿区画
104	東武野 法木上	グロップ	213	浅鉢	加Ⅱ期			23	沈殿区画
105	本庄市 今年向町	遺層	1	有孔浅鉢	加Ⅱ期			24	器身・頸部と土器
106	川口市 南東	29号遺層	2	浅鉢	加Ⅱ期			26	器身・頸部と土器
107	川口市 南東	29号遺層	23.3	浅鉢	加Ⅱ期			26	
108	川口市 南東	29号遺層	4	浅鉢	加Ⅱ期			26	
109	川口市 南東	29号遺層	5	浅鉢	加Ⅱ期			26	内縁部・底縁部
110	川口市 南東	40号遺層	65	浅鉢	加Ⅱ期			26	沈殿区画
111	川口市 南東	40号遺層	66	浅鉢	加Ⅱ期			26	器身・頸部と土器
112	上尾市 御北	土20	11	瓶口	加Ⅱ期			27	口部
113	所沢市 鶴巻	1号遺層	4	有孔浅鉢	加Ⅱ期			27	口部
114	比呂山町 まます	グロップ	116	浅鉢	加Ⅱ期			29	器身・頸部と土器
115	伊勢町 原	90号遺層	10	浅鉢	加Ⅱ期			30	外縁部
116	伊勢町 原	90号遺層	8	浅鉢	加Ⅱ期			30	
117	伊勢町 原	90号遺層	15	浅鉢	加Ⅱ期			30	
118	伊勢町 原	90号遺層	12	浅鉢	加Ⅱ期			30	
119	伊勢町 原	90号遺層	40	浅鉢	加Ⅱ期			30	器身・頸部と土器
120	富士見市 長溝	2号遺層	7	浅鉢	加Ⅱ期			31	内縁部・底縁部・器身・頸部と土器
121	富士見市 御沢	土94		浅鉢	加Ⅱ期			32	内縁部・底縁部
122	富士見市 中野	21号遺層	1	浅鉢	加Ⅱ期			32	
123	富士見市 中野	49号遺層	2	有孔浅鉢	加Ⅱ期			32	器身・頸部と土器
124	富士見市 中野	49号遺層	2	有孔浅鉢	加Ⅱ期			32	
125	富士見市 中野	18号遺層	80	浅鉢	加Ⅱ期			32	瓶口
126	富士見市 中野	18号遺層	90	有孔浅鉢	加Ⅱ期			32	
127	富士見市 中野	40号遺層	1	浅鉢	加Ⅱ期			32	
128	所沢市 藤倉	29号遺層	3	有孔浅鉢	加Ⅱ期			32	
129	狭山市 浅野	全層	20	浅鉢	加Ⅱ期			36	沈殿区画
130	狭山市 丸山	9号遺層	34	浅鉢	加Ⅱ期			36	器身・頸部と土器
131	狭山市 丸山	13号遺層	3	浅鉢	加Ⅱ期			36	
132	飯能市 吉田	遺層外	18	浅鉢	加Ⅱ期			36	器身
133	飯能市 平久保	16号遺層	16	浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
134	飯能市 加能登	29号遺層	22	浅鉢	加Ⅱ期			37	沈殿区画
135	飯能市 加能登	11号遺層	24	浅鉢	加Ⅱ期			37	器身
136	飯能市 加能登	11号遺層	27	浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
137	志本町 中道	9号遺層	32	浅鉢	加Ⅱ期			37	沈殿区画
138	志本町 中道	9号遺層	33	浅鉢	加Ⅱ期			37	
139	志本町 中道	9号遺層	34	浅鉢	加Ⅱ期			37	外縁部・底縁部
140	志本町 中道	9号遺層	35	浅鉢	加Ⅱ期			37	
141	志本町 中道	土100	4	浅鉢	加Ⅱ期			37	
142	志本町 中道	土100	6	浅鉢	加Ⅱ期			37	
143	飯沼市 深谷	埋蔵1		浅鉢	加Ⅱ期			37	沈殿区画
144	飯沼市 深谷	埋蔵1		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
145	飯沼市 深谷	埋蔵1		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
146	飯沼市 深谷	埋蔵3		小型浅鉢	加Ⅱ期			37	沈殿区画
147	飯沼市 深谷	埋蔵3		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
148	飯沼市 深谷	埋蔵3		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
149	飯沼市 深谷	埋蔵1-3		小型浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
150	飯沼市 深谷	埋蔵1-3		小型浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
151	飯沼市 深谷	埋蔵1-3		小型浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
152	飯沼市 深谷	埋蔵1-3		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器
153	飯沼市 深谷	埋蔵1-3		浅鉢	加Ⅱ期			37	器身・頸部と土器

塗彩範囲の記号は以下の通り。a, b, 器身範囲について内外面の記号がないものは外面に○をした。また、a全面



第199図 埴玉県内出土の縄文時代中期の塗彩された土器 (1/12)



第200図 埼玉県内出土の塗彩文様のある土器集成 (1/4)

第3章 ふじみ野市内における縄文時代中期の継続型集落について

ふじみ野市内には、縄文時代中期の集落遺跡が22箇所存在する。このうち、上福岡地区には3箇所（西・ハケ・権現山遺跡）のみしか中期住居跡が確認されていない。この内、西遺跡は大井地区の遺跡立地と同様のあり方を示しているので実質2箇所となる。このことは中期集落の立地と深くかかわっている。つまりふじみ野市域の西側は武蔵野台地、東側は荒川低地にまたがり海拔標高は台地最高部で49m、荒川低地部で6m弱で、高低差は43mを超え、縄文時代前期集落が武蔵野台地へり際に多く立地（上福岡地区）するのと比較して、中期の集落は台地へりからやや内陸に3～4km、湧水川を遡るように位置する（大井地区）傾向が読み取れる。

この小稿では、中期に限定して土器型式にして4～5期の短期継続型集落3遺跡と土器型式10期以上の長期継続型集落2遺跡を概観し、遺跡の在り方を考える素材を提供していきたい。

I 短期継続型集落の特徴

亀居遺跡は、福岡江川と呼ぶ湧水川の湧水部の台地上にある遺跡であり、今回報告分を含めて16棟の竪穴住居が知られている。本報告の16号住居には炉内埋設（炉体）土器があり、既報告の2号住居の炉体土器に酷似した阿玉台Ⅱ式古相の特徴をもつものであった。亀居遺跡の住居は、炉部未掘の13号住居を除き、すべての住居が炉体土器をもって住居の時期は明確であり、それらすべては亀居Ⅰ期（阿玉台Ⅰb式古相・猪沢式新相）から亀居Ⅳ期（阿玉台Ⅱ式新相・藤内式古相）の間である。集石土坑・土坑・ピット・落とし穴などの遺構出土の土器も、これらの土器と同様である。土坑・ピットを中央に竪穴住居が環状に取り囲み、その外に落とし穴が配置される構造をもつ集落であるが、竪穴住居の複合関係はまったく見られず、また加曾利E式期の土器片等もまったく出土しない。これは長期継続型の大集落である東台遺跡や西ノ原遺跡と対照的な特徴といえる。亀居遺跡の調査率は40%を超えており、集落の住居総数は25軒前後となろう。粘土貯蔵穴や焼粘土塊の存在から、土器作りを行ったムラではあ

るが、同時に存在した住居数は5軒を超えない。以上が短期継続型集落である亀居遺跡の一般の特徴である。

江川南遺跡は、亀居遺跡からやや福岡江川下流域の対岸の南側低位台地上にある遺跡で、本報告を含めて竪穴住居跡6軒が確認されている。これらは阿玉台Ⅱ式古相・新道式新相から、藤内式新相にわたることが炉体土器から明らかである。土坑・ピットや遺構外出土の土器も同様である。このことから亀居遺跡にやや遅れて出現し、消滅もやや遅れるという特徴をもつといえる。

出土土器のうち、併行する阿玉台土器は時期が新しくなると共に減少し、勝坂系土器の比率が増大する。江川南遺跡自体が亀居遺跡よりも、開始も消滅も遅れることを反映して、阿玉台系よりも勝坂系の比率が多くなる。浅鉢というより舟形無文土器も注目される。

江川南遺跡の調査率は約4分の1であり、今後、住居を始めとする遺構の増加は予想されるが大集落にはならない。連続する3～4時期の遺構群をもつ短期継続型の小集落である。僅か6軒とはいえ住居相互の切り合い関係が全く見られないことも亀居遺跡と共通した江川南遺跡の特徴である。

亀居遺跡と江川南遺跡は、ともに中期前半の短期継続型集落遺跡の典型例といえよう。

II 神明後遺跡の集落としての特質

神明後遺跡は、さかい川に面した南側の低位台地上にある旧石器時代、縄文時代、古代、中近世の複合遺跡である。今回報告する第28地点の調査では古代の住居2棟と中世の溝も調査されたが、縄文中期の遺構と遺物の多彩な資料が注目される。特徴を要約する。

- 1 縄文中期後半の竪穴住居12棟が調査されたこと。
- 2 これらの多くは、重複・複合関係を持っている。
- 3 中期前半の集石遺構と遺物も出土した。
- 4 浅鉢の内面全面に文様的に彩色された土器が調査された。多摩丘陵東北部では初の資料である。
- 5 大きい浅鉢と有孔鈔付土器に赤彩著しい土器が大量に出土した。加曾利EⅠ新期の生活に集中している。

6 複相半隆帯文のみで、撚糸文・縄文など地文を持たない土器が加曾利EⅠ期に大量に出土した。

神明後遺跡は、これまで中期後半の短期継続型集落と見なされてきた。阿玉台I b式新相の住居1軒が知られているが、中期後半の住居密集部から離れた位置にあったためである。この遺跡は中期前半の集石遺構や遺物の出土と、中期前半の住居は一般に台地縁より奥部に多いこと、遺跡の発掘率が2割に達していないことから、中期後半（加曾利E各期）の継続型集落ではあるが、短期継続型集落と断定するのは尚早といえる。

石棒形の転用や屋外埋壙が人体埋葬も知られている縄文中期の集落である。

Ⅲ 長期継続型集落の特徴

先の短期継続型集落に比較して、ここで扱おうとする市内の縄文中期長期継続型集落は、住居件数が100件以上確認され、縄文時代中期のほぼ全期間にわたって住居跡が確認されている集落をさす。具体的には大井地区の2つの遺跡、一つは西ノ原遺跡、もう一つは東台遺跡を取り上げる。ともに武蔵野台北東部における最大級の縄文時代集落遺跡である。

ここでは次の視点で概論を進め、

- ①住居が営まれてから、廃絶に至るまでの集落変遷
 - ②拠点集落として機能したのはいつの時期なのか
- を検討してみる。長期継続型集落を大別して形成期・発展～盛期・衰退期の3期に分けて、土器形式から分類した。ただ、両遺跡とも遺跡範囲内における未調査部分も多く、未だ全貌が明らかになったとは言えない状況ではあるが、今後の検討材料に資する立場で記述する。

西ノ原遺跡を取り上げる。福岡江川同様の湧水川で富士見市境を流れる「さかい川」の右岸に位置し、新河岸川の河口から約3kmの内陸に位置する。旧石器時代・縄文時代早期～後期・平安時代・中世に亘る複合遺跡である。総面積は約10haで、発掘調査率は約40%である。縄文時代の遺構と遺物は、早期・前期・中期・後期前半に亘っている。中期の中でも、中期初頃は希薄であり、中期末の加曾利EⅣ期も無いに等しい。遺跡の主体は、縄文時代中期前半の阿玉台式I b期か

ら加曾利EⅢ期にかけての時期である。

2008年3月現在で、141地点に及ぶ調査で180軒を越す住居跡が環状集落として形成されていることが判明した。これまでの調査率からみて堅穴住居の総数は220～250軒に達すると思われる。

縄文中期集落としての西ノ原遺跡は、大別して形成期・発展～盛期・衰退期の3期に分けられ、土器形式から細分して13期まで分類できる。

形成期は、阿玉台I b期から勝坂Ⅱ期新相（西ノ原1期～5期）までで、西ノ原集落の基盤となった段階である。特徴は、住居相互は30～50m離れて遺跡の西側から南部にかけて弧状に7軒が配置され、さかい川に向かって下る北向きの緩斜面の上部に分布し、広場を取囲むという住居配置には至っていない。先述した亀居遺跡の亀居I～Ⅳ期に対比される時期である。この期は亀居遺跡と比較して、住居数・集石土坑をはじめとする遺構数・住居の規模ともに劣るといえる。ただ、住居相互の切り合いがないというのは共通している。このことが当該期の特徴ともいえないもない。

発展～盛期 勝坂Ⅲ期から加曾利EⅡ期に至る期間である。この期に遺跡中央を中心として、住居が円弧上に配置される勝坂Ⅲ期から加曾利EⅠ新期までと、遺跡の東寄りを中心に住居が配置される加曾利EⅡ期に分けられる。住居は深く作られ、壁溝を持ち、建替や拡張が一般的に見られ、住居南入口部に埋壙が出現するのは加曾利EⅠ古式期であり、その後も継続する。朱塗土器・有孔鈔付土器が目立ち、焼粘土塊出土から集落内での土器作りが確認され、土製品や土製円板も多く出土し始める。全ての住居に多いのではなく、特定の住居にのみ多い特徴がある。65号住居からは23個の土製円板が出土している。加曾利EⅡ式期が最盛期となり73軒が確認され、遺跡の東側に住居分布の中心が移り、それまでの環状からは東におよそ100m程ずれた位置に新たに環状集落が形成された。

また、祭祀を思わせる遺物群や、軟玉製品や、異系統の土器が特に多い住居もあり拠点集落としての要件を備えてきている。西ノ原遺跡が拠点集落として機能したのは、勝坂Ⅲ期から加曾利EⅡ期にかけての時期である。また、その後半の加曾利EⅡ期には、住居配置の中心が東に移動することの他、中央部では住

居配置円弧の交点に当たることから、住居の重複、切り合いが著しい特徴がある。

重要な特徴として、墓坑と推定できる遺構群が住居空白部に数多く見られることである。

衰退期 加曾利EⅢ・EⅣ期である。

EⅢ期の住居1軒のみで、EⅣ期には住居は作られなくなる。墓坑だけは、加曾利EⅢから加曾利EⅣ期にも引き続いて作られ、かつての生活の場であった祖先の住んだ地に、墓つくりだけが行われるという残映期で、後期の堀之内期の墓坑も確認される。

この後、西ノ原遺跡に住居は作られなくなり、さかい川下流に沿った神明後遺跡や苗間東久保遺跡に住居地を替えた可能性とも考えられる。

東台遺跡 前述の西ノ原遺跡の南わずか約1km、狭山丘陵北麓を水源とする砂川が唯一崖線を形成する右岸の台地上で、河口より3km入り込んだ内陸の遺跡で、17haの広がりをもつ拠点集落である。44地点での発掘調査が行われ時期不明住居跡を除いても153軒の縄文時代住居跡が確認されている。調査率6割。

形成期 勝坂Ⅱ式期以前の集落をいう。現時点で確認されている縄文時代中期住居跡の内、最も古いのは141号住居で弥生期に位置づけられる。西ノ原遺跡が阿玉台Ⅰb期古相が最古であるので、極めて近い時期に集落が形成され始めた事は共通し特徴的である。

遺跡中央部から東部にかけて散在し、砂川に向かって下りる緩斜面の上部に分布する。

発展～盛期 勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅡ式期で住居数が急増・密集して分布する時期である。これまでに98軒を確認。住居数のピークは43軒になる加曾利EⅠ新式期である。また遺跡中央部には9基の柱穴で構成される掘立柱建物跡が作られる。桁行7.72m・梁行3.9mを測り、主軸はほぼ南北方向を指す。これが遺跡のシンボルの存在になり、これを中心にしたように堅穴住居が分布する傾向になり、一般の住居は相互に重複が目立ち始めるが、掘立柱建物跡との重複は一切ない。この頃の集落は環状を形成し、その直径は120m前後が読み取れる。続く加曾利EⅡ式期には前の時期に比較しやや減少を始めるが、東側にも占地を広げてくる。

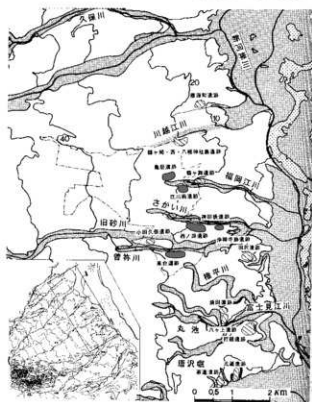
衰退期 住居数はやはり激減する。EⅢ式期で遺跡

東端部から4軒、EⅣ式期は遺跡西側から6軒を数える。後者はいずれも柄鏡形を呈する住居である。環状集落は崩れる。その後の後期に入り、7軒の住居が継続して作られ堀之内式の3軒をもって遺跡の終焉となった。

西ノ原と東台両遺跡は水系は異なるものの、わずか1km離れただけで、ほぼ同面積で同時にかつ長期にわたって営まれた北武蔵野を代表する縄文時代中期の長期継続型集落であり拠点集落である。

共に大きい樽型有孔罎付土器も出土し、塗彩土器や異系統の土器が顕著であることも共通している。

(今井亮・坪田幹男)



第201図 周辺中期前半遺跡分布

引用・参考文献

- 大井町遺跡調査会 『西ノ原遺跡』大井町遺跡調査会報告第6集 1996年
 大井町遺跡調査会 『亀居遺跡』大井町遺跡調査会報告第8集 1998年
 大井町遺跡調査会 『江川南遺跡Ⅱ・神明後遺跡Ⅰ』大井町遺跡調査会報告第16集 2005年
 大井町遺跡調査会 『西ノ原遺跡Ⅳ・東台遺跡Ⅴ』大井町遺跡調査会報告第17集 2005年

第92表 ふじみ野市内縄文時代遺跡消長表（アミかけは本文で取り上げた遺跡）

段階	時期	遺跡型式	遺跡																				
			鶴ヶ岡・西	亀居	江川南	鶴ヶ岡	東久保南	東中野西	西ノ原	中沢	中沢前	神明後	舟倉寺後	高野東久保	小久	西台	大井戸上	大井戸新	本村	東台			
縄文前期	成	豆粒文系																					
		隆起縄文系																					
		爪形文系																					
		多縄文系																					
		井草																					
		大丸																					
		夏島																					
		稲荷台																					
		花輪台																					
		草坂																					
縄文中期	立	三戸																					
		田戸下層																					
		田戸上層																					
		子母口																					
		野島																					
		鶴ヶ島台																					
		茅山下層																					
		茅山上層																					
		打越・吉井																					
		縄文後期	築	花積下層																			
関山																							
黒沢																							
諸磯 a																							
諸磯 b																							
諸磯 c																							
十三番掘																							
縄文中期	展			五領ヶ台																			
				湯沢新・阿玉台1層古																			
				新道古・阿玉台1層新																			
		新道新・阿玉台2層古																					
		藤内古・阿玉台2層新																					
		藤内新・藤坂2層新																					
		井戸尻I・藤坂3層古																					
		井戸尻II・藤坂3層新																					
		加曾利E I 古																					
		加曾利E I 新古相																					
加曾利E I 新新相																							
加曾利E II 古相																							
加曾利E II 新古相																							
加曾利E II 新新相																							
加曾利E III																							
加曾利E IV																							
縄文後後期	築	称名寺 I																					
		称名寺 II																					
		堀之内 I																					
		堀之内 II																					
		加曾利 B I																					
		加曾利 B II																					
		曾谷																					
		安行 I																					
		安行 II																					
		縄文末期	築	安行 III a																			
安行 III b																							
安行 III c																							
安行 III d																							
千瀬																							

■は遺物、●印は住居、▲印はその他の遺構（2008年3月現在）

附編 神明後遺跡および駒林遺跡におけるテフラ分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

埼玉県ふじみ野市(旧大井町域内)に所在する神明後遺跡および駒林遺跡は、武蔵野台地北部を構成する台地の一つである大井台に位置する。大井台は、南西-北東方向に流下して荒川低地に注ぐ福岡江川と砂川堀の2本の河川に挟まれた低位の段丘であり、2本の河川の間には、それらと平行して、さかい川が流れている。福岡江川と砂川堀のそれぞれの河川の対岸の段丘は、大井台よりも5mほど高い高位の段丘が広がっている。久保(1988)や貝塚ほか編(2000)などによる地形分類図では、大井台は立川面に区分されており、その両側の高位段丘は武蔵野面のM2面に区分されている。なお、立川面については、上位より約4万年前のTe1面、約3~2万年前のTe2面、約2~1.5万年前のTe3面に細分されている(貝塚ほか編,2000)が、大井台の詳細な地形面の対比は確認されていない。

神明後遺跡は、さかい川右岸の大井台平坦面上に位置し、駒林遺跡は、福岡江川右岸の大井台平坦面上に位置する。2006年に行われた神明後遺跡第28地点の発掘調査では、縄文時代中期とされる住居跡および集石などが多数検出されたほか、平安時代の住居跡1軒および時期不明とされた堀跡と溝跡などが検出されている。一方、駒林遺跡第1地点の発掘調査では、溝跡が検出され、さらにその溝跡の埋積過程において、茶昆跡や道路跡とされる硬化面などが検出されている。茶昆跡については、そこから採取された炭化材の放射性炭素年代で $480 \pm 80BP$ という値が得られているが、溝跡自体の年代は不明とされている。

本報告は、上記した神明後遺跡第28地点より検出された堀跡と駒林遺跡第1地点の溝跡覆土中に含まれる指標テフラの調査を行い、その構築年代について検討する。

1. 試料

(1) 神明後遺跡第28地点

分析対象とされた堀跡1は、発掘調査資料によれば、さかい川と直交する形で南北方向に伸びており、上幅約350cm、下幅71~106cm、深さ200cmを測る葉研状の断面形態を呈する。覆土は、上位より1~9層に分層されている。このうち、1~8層は黒褐色~暗褐色を呈するいわゆる黒ボク土であるが、9層は褐色を呈するいわゆるロームからなる。

試料は、堀跡断面はほぼ中央より、最上部の2層とその直下の4層から堀底直上の9層まで厚さ10cm連続でサンプルNo.1~20が採取されている。また、上記した地点で一部の試料の採取にとどまった1,3層については、同層が厚く堆積する中央部右側より、同様にサンプルNo.21~29が採取されている。これらの試料の内眼観察では、テフラ由来する碎屑物である軽石やスコリアなどが認められなかったことから、分析対象試料は、最上部覆土を除く3~9層までの各層位から各1点の計7点を選択した。試料の観察所見および分析対象として選択した試料を表1に示す。

(2) 駒林遺跡第1地点

分析対象とされた大溝1は、発掘調査資料によれば、調査区北側から南北方向で本調査区に入り、本調査区内で直角に曲がり、東側へ向かう。上幅275~335cm、下幅64~69cm、深さ175cmを測る葉研状の断面形態を呈する。覆土は、上位より1~21層に分層されているが、1,2層は検出面全体を覆っていることから、実際の覆土は3層以下とみられる。覆土はいずれも黒褐色~暗褐色を呈するいわゆる黒ボク土であるが、覆土下部の20層および21層にはローム由来する褐色土粒が多量に含まれている。このうち6~8、11~14、17~19の各層は、溝跡側壁にブロック状に堆積しており、溝跡の主体となる土層は、上位より3~5、9、10、15、20、21の各層となる。なお、4層と9層は、硬化面とされ、道路跡と推定されている。また、9層直下の10層相当からは、茶昆跡とされる遺構が検出されており、茶昆跡出土の炭化材は $480 \pm 80BP$ の放射性炭素年代を示した。(パリオ・サーヴェイ株式会社2007)

表1. 神明後遺跡第28地点堀跡1試料一覧

サンプル No.	土色	備考	調査所見*	分析試料
1	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	1層上部/2層上部	
2	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	2層上部	
3	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	2層中部	
4	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	2層中部	
5	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	2層下部	
6	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	2層下部～3・4層上部	
7	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	4層上～中部	
8	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	4層中部	●
9	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	4層下部	
10	黒褐色	径1～2mmの褐色土粒少量	4層最下部～5層上部	
11	黒褐色	径1～2mmの褐色土粒少量	5層上～中部	
12	黒褐色	径1～2mmの褐色土粒少量	5層中～下部	●
13	黒褐色	径1～2mmの褐色土粒少量	5層下部	
14	黒褐色	径5mm以下の褐色土粒少量	6層	●
15	黒褐色	径2～3mmの褐色土粒少量	6層最下部～7層	●
16	暗褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	7層下部～8層上部	
17	暗褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	8層中部	●
18	褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	8層下部～9層上部	
19	褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	9層上～中部	
20	褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	9層中～下部	●
23	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	1層中部	
25	黒褐色 (やや明るい)	径1～2mmの褐色土粒微量	1層下部	
27	黒褐色	径1～2mmの褐色土粒微量	3層中部	●

*資料および掘跡セクションの記載に基づく

表2. 駒林遺跡第1地点大溝1試料一覧

サンプル No.	土色	備考	調査所見	分析試料
1	暗褐色	径1～2mmの褐色土粒少量	1層中部	
2	黒褐色	褐色土粒は認められない	1層最下部～2層上部	
3	黒褐色	褐色土粒は認められない	2層中部	●
4	暗褐色	褐色土粒は認められない	2層下部～3層上部	
5	暗褐色	褐色土粒は認められない	3層中部	●
6	黒褐色 (やや明るい)	褐色土粒は認められない	3層下部～4層上部	道路面?
7	黒褐色 (やや明るい)	褐色土粒は認められない	4層下部～5層上部	
8	黒褐色	褐色土粒は認められない	5層中～下部	
9	黒褐色 (やや明るい)	径2～3mmの褐色土粒少量	9層上部	道路面?
10	黒褐色 (やや明るい)	径2～3mmの褐色土粒少量	9層下部	
11	黒褐色	径1mm程度の褐色土粒微量	10層	茶児跡検出
12	黒褐色	径1mm程度の褐色土粒微量	12層/15層上部	
13	黒褐色	径1mm程度の褐色土粒微量	15層	●
14	黒褐色	径1mm程度の褐色土粒微量	15層下部	
15	黒褐色	径5mm以下の褐色土粒中量	20層	●
16	黒褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	21層上部	
17	黒褐色	径10～15mmの褐色土塊少量、径5mm以下の褐色土粒多量	21層下部	●

*資料および大溝セクションの記載に基づく

試料は、上記した溝跡において主体となる土層が認められる断面はほぼ中央より、1～21層までを対象に厚さ10cm連続でサンプル No.1～17が採取されている。

これらの試料の内視観察では、テフラに由来する砕屑物である軽石やスコリアなどが認められなかったことから、分析対象試料は、2層と主要覆土から硬化面の4,9層を除く各層位より各1点の計7点を選択している。試料の観察所見および分析対象として選択した試料を表2に示す。

表3. 神明後遺跡第28地点堀跡1のテフラ分析結果

サンプル No.	層位	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
27	3層中部	+	B・b,B・sb,Br・sb	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
8	4層中部	+	B・sb,Br・sb	1.5	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
12	5層中～下部	+	B・sb,Br・sb	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
14	6層	(+)	B・sb,Br・sb	1.0	++	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
15	6層最下部～7層	(+)	B・sb,Br・sb	1.0	++	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
17	8層中部	(+)	B・sb,Br・sb	1.0	+++	cl・bw	(+)	GBr・sb	1.2	
20	9層中～下部	(+)	B・sb,Br・sb	1.0	+++	cl・bw	(+)	GBr・sb	1.2	

<凡例>

-:含まれない。(+:)きわめて微量,+ :微量,++ :少量,+++ :中量,++++ :多量,

B :黒色, G :灰色, br :褐色, GB :灰褐色, GBr :灰褐色, R :赤色, W :白色,

g :良好, sg :やや良好, sb :やや不良, b :不良, 最大粒径はmm,

cl :黒色透明, br :褐色, bw :バブル型, md :中間型, pm :軽石型。

表4. 駒林遺跡第1地点大溝1のテフラ分析結果

サンプル No.	層位	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
3	2層中部	++	B・b,B・sb,GB・sb,Br・sb,Br・sg	2.0	(+)	cl・bw,cl・pm	++	GBr・sb	1.2	
5	3層中部	+	B・sb,Br・b	1.5	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
8	5層中～下部	+	B・sb,Br・b	2.0	+	cl・bw	++	GBr・sb	1.2	
11	10層	(+)	B・sb,Br・b	1.0	+	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
13	15層	(+)	B・sb,Br・b	1.0	+	cl・bw	+	GBr・sb	1.2	
15	20層	(+)	B・sb,Br・b	1.0	+	cl・bw	-			
17	21層下部	-			++	cl・bw	-			

<凡例>

-:含まれない。(+:)きわめて微量,+ :微量,++ :少量,+++ :中量,++++ :多量,

B :黒色, G :灰色, br :褐色, GB :灰褐色, GBr :灰褐色, R :赤色, W :白色,

g :良好, sg :やや良好, sb :やや不良, b :不良, 最大粒径はmm,

cl :黒色透明, br :褐色, bw :バブル型, md :中間型, pm :軽石型。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

なお、軽石または火山ガラスが検出された場合には、屈折率の測定を行い、テフラの特定のための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

3. 結果

(1) 神明後遺跡第28地点堀跡1

結果を表3に示す。スコリアは、サンプルNo.27、8、12(3層～5層)に微量、サンプルNo.14、15、17、20(6層～9層)に極めて微量認められる。スコリアの特徴は、サンプルNo.27、8、12では、最大径1.5～2.0mm、他の試料では最大径約1.0mm、黒色で発泡やや不良のスコリアおよび褐色で発泡やや不良のスコリアが混在し、サンプルNo.27には黒色で発泡不良のスコリアも認められる。

火山ガラスは、サンプルNo.27、8、12(3層～5層)に微量、サンプルNo.14、15(6層～7層)に少量、サンプルNo.17、20(8層～9層)に中量含まれる。いずれの試料においても無色透明のバブル型である。

軽石は、サンプルNo.27、8、12(3層～5層)に少量、サンプルNo.14、

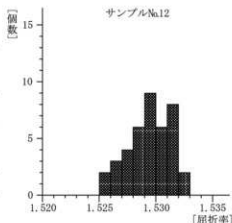


図1. 神明後遺跡第28地点堀跡1の軽石の屈折率

15 (6層～7層)に微量、サンプル No. 17、20 (8層～9層)に極めて微量含まれる。いずれの試料の軽石も、特徴は同様であり、最大径は約1.2mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を含有するものも認められた。

サンプル No. 12より抽出した軽石の屈折率の測定結果は、 $n_1.525-1.532$ (mode1.529-1.530)であった(図1)。

(2) 胸林遺跡第1地点大溝1

結果を表4に示す。スコリアは、サンプル No. 3 (2層)に少量、サンプル No. 5、8 (3層～5層)に微量、サンプル No. 11、13、15 (10層～20層)に極めて微量認められ、サンプル17 (21層)には認められない。スコリアの特徴は、サンプル No. 3では、最大径約2.0mm、黒色で発泡不良、黒色で発泡やや不良、灰黒色で発泡やや不良、褐色で発泡やや不良の各スコリアが混在し、少量の褐色で発泡やや良好のスコリアも認められた。サンプル No. 5から15までの試料では、最大径1.0～2.0mmの黒色で発泡やや不良、褐色で発泡やや不良の各スコリアが混在する。

火山ガラスは、サンプル No. 3 (2層)に極めて微量、サンプル No. 5～15 (3層～20層)までは微量、サンプル No. 17 (21層)には少量含まれる。サンプル No. 3には無色透明のバブル型と軽石型が混在するが、それ以外の試料においては無色透明のバブル型である。

軽石は、サンプル No. 3～8 (2層～5層)に少量、サンプル No. 11、13 (10層、15層)には微量認められ、サンプル No. 15、17 (20層、21層)には認められない。いずれの試料の軽石も、特徴は同様であり、最大径は約1.2mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を含有するものも認められた。

サンプル No. 8より抽出した軽石の屈折率の測定結果は、 $n_1.527-1.533$ (mode1.529-1.530)であった(図2)。

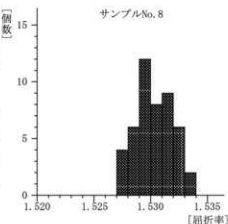


図2 胸林遺跡第1地点大溝1の軽石の屈折率

4. 考察

(1) 指標テフラの同定

神明後遺跡第28地点堀跡および胸林遺跡第1地点大溝のテフラ分析により検出されたテフラの碎屑物のうち、各試料に認められた軽石は、その特徴から、同一のテフラに由来すると考えられる。当社における標準試料との比較と軽石の屈折率から、これらの試料の軽石は、平安時代の天仁元年(1108年)に浅間火山より噴出した浅間Bテフラ(As-B; 新井, 1979)に由来する。

両遺跡の各試料より検出されたスコリアについては、遺構の層位と調査区の地理的位置から、完新世に富士山より噴出したテフラである新期富士テフラに由来すると考えられる。新期富士テフラは、上杉(1990)による記載では、富士土層中のS-0から宝永スコリアのS-25まで記載されており、さらにこの中のテフラによっては、細分されているものもあり、50枚近くのテフラにより構成されている。ただし、給源から離れた神奈川県東部や東京都においては、これまでの低地の調査例から、検出される新期富士テフラの枚数は極端に少なくなり、例えば、縄文時代後期から弥生時代前期頃までの主要なテフラであるS-10、11(湯船第一スコリア(Yu-1))、S-13(砂沢スコリア(Zu))、S-22(湯船第二スコリア(Yu-2))、平安時代の9世紀に多量のスコリアを噴出したとされているS-24-6～8、さらには江戸時代に噴出した宝永スコリア(F-Ho)などにほぼ限定される。武蔵野台地上の黒ボク土層における分析事例では、その中の個々のテフラを識別できた例はほとんどなく、これは、黒ボク土層形成過程における攪乱や再堆積により複数のテフラ層が混交してしまうためであると考えられる。今回の遺構覆土においても、色調や発泡度の同様のスコリアが、特に濃集する層位も示さずに、広い層位にわたり拡散する状況が認められた。おそらく、これらのスコリアは、噴出年代の異なる複数のテフラに由来するものが混在している可能性があるが、As-Bと混在している

ことヤスコリアの特徴から、平安時代のS-24-6~8に由来するスコリアが主体を占めていると考えられる。

両遺跡の全試料から検出された火山ガラスについては、これまでの武蔵野台地の黒ボク土層における分析例により、無色透明のバブル型は立川ローム層中部に含まれている始良Tn火山灰（AT：町田・新井,1976）に由来すると考えられる。

（2）神明後遺跡第28地点堀跡1の構築時期について

覆土におけるAs-Bの軽石およびS-24-6~8を主体とするスコリアは、覆土上部の3~5層に比較的多い傾向が認められたが、濃集というほどの産状ではなかった。また、As-Bの軽石とS-24-6~8のスコリアは、全試料において混在し、かつ両テフラの噴出年代の差異を反映した各テフラの層位的な産状も不明瞭であった。したがって、覆土中に認められたAs-Bの軽石とS-24-6~8のスコリアは、堀跡の埋積過程において降下堆積したものではない可能性が高い。堀跡の埋積は、その覆土の特徴から、降雨時の流水や乾燥時の崩落と重力などにより、堀跡周囲の堆積物が堀跡内に流れ込むことによって進行したことが推定される。この場合、堀跡底直上の9層からも極めて微量ではあるがAs-Bの軽石が検出されたことから、堀跡の埋積開始時期には周囲の土層中にAs-Bが含まれていたとみられ、すなわち埋積の開始時期はAs-Bの降灰以後、古くともAs-Bの降灰した12世紀初頭より以降である可能性がある。

なお、神明後遺跡より西北西へ約1.3km離れた福岡江川谷頭付近の大井台上に位置する江川南遺跡および亀久保堀跡遺跡でも、今回とほぼ同規模の葉研状の断面を呈する堀跡が検出されている。特に、亀久保堀跡は、その延長が神明後遺跡に向かっていとされている。当社では、両遺跡における堀跡について、今回と同様のテフラ分析を行い、As-Bの軽石とS-24-6~8のスコリアを検出している。ただし、これらの遺跡の堀跡覆土では、As-Bの軽石が上部に多く、下部への拡散が認められないこと、S-24-6~8のスコリアがAs-Bの下位の覆土から産出することなどから、堀跡の埋積過程において、テフラの降灰があったと考えた。すなわち、堀の構築時期についてはS-24-6~8のスコリアが降灰した9世紀より以前の可能性があるとした。上述したように今回の神明後遺跡第28地点の堀跡1の埋積開始時期は12世紀初頭以降と推定されることから、現時点では、亀久保堀跡と神明後遺跡第28地点の堀跡1とは構築時期の異なる遺構の可能性が高い。

（3）駒林遺跡第1地点大溝1の構築時期について

覆土におけるAs-Bの軽石およびS-24-6~8を主体とするスコリアの産状は、覆土上部に比較的多い傾向を示したが濃集は認められず、これらはほぼ全試料において混在し、かつ両テフラの噴出年代の差異を反映した各テフラの層位的な産状が不明瞭であるなど、前述した神明後遺跡第28地点堀跡1とはほぼ同様の産状を示した。したがって、駒林遺跡第1地点大溝1覆土中の軽石およびスコリアも溝跡周囲の堆積物中より流れ込んだものと考えられる。

大溝1では15層よりAs-Bの軽石が検出されたことから、埋積初期段階においてAs-Bの軽石は既に周囲の土層中に含まれていた可能性が高い。したがって、大溝1における埋積時期はAs-Bの降灰した12世紀初頭以降とみられ、上位の10層と同層位とされた茶匙跡出土炭化材の放射性炭素年代とも矛盾しない。15層より下位の覆土（20層および21層）については、多量の褐色土粒が含まれることや分析結果においてローム層中に含まれるATの火山ガラスがやや多い傾向が認められたことなどから、大溝1下部側壁を構成するロームに由来する砕屑物を多く含んでいると考えられる。したがって、この層位の覆土でAs-Bが検出されなかったことは、覆土の由来がAs-Bを含まない下層の土壌であることを示唆するものの、20層および21層の埋積時期が必ずしもAs-B降灰以前であることを示すものではないと考える。現時点では、大溝1の構築時期を決定するまでの資料は得られていないが、埋積の初期段階がすでに12世紀初頭以降であったことは、今後の本遺構の構築時期検討における有意な資料と言える。

引用文献

- 新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編, 2000, 日本の地形4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会, 349p.
- 久保純子, 1988, 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形—. 地理学評論, 61, 25-48.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, 339-347.
- 上杉 陽, 1990, 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その1: S-25~Y-114—. 関東の四紀, 16, 3-28.
- パリオ・サーヴェイ株式会社2007「江川南遺跡・第20地点および駒林遺跡第1地点から出土した炭化材の年代測定」
【埼玉県ふじみ野市 市内遺跡群2】

報告書抄録

書名	市内遺跡群3	シリーズ名	ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第4集			
編集者	高崎直成	著者	今井 堯・高崎直成・坪田幹男			
編集機関	ふじみ野市教育委員会	所在地	〒356-8555 ふじみ野市大井中央一丁目1番1号 TEL 049 (261) 2811			
発行日	2008年(平成20年)3月30日	市町村コード	北緯	調査開始	調査面積	調査原因
所収遺跡地点名	所在地	遺跡コード	東経	調査終了	m ²	調査担当者
		種別/主な時代・主な遺構・主な遺物				
特記事項						
川崎遺跡第21地点	川崎1-6-10の一部	112453	35°53'07"	20060411	124	個人住宅建設
		25-003	139°31'07"	20060420		笹森健一
集落跡/平安住居跡1軒、溝検出・土師器壺、須恵器坏(9世紀)						
古代集落の南端で9世紀後半の住居跡を検出。東端で竈南側(右側)は標状施設と思われる。						
亀居遺跡第61地点	亀久保2-13-4の一部	112453	35°51'51"	20061004	88	個人住宅建設
		30-030	139°30'27"	20061013		高崎直成
集落跡/縄文中期住居跡1軒、集石2基、土坑1、ピット6検出・縄文土器(阿玉台目)、縄文時代石器						
中期前半、阿玉台目式期古相の住居跡を検出。阿玉台1b式期からII式期と推測する本集落時期の範疇に入る。						
鶴ヶ舞遺跡第10地点	鶴ヶ舞1丁目64番6	112453	35°51'55"	20060605	20	個人住宅建設
		30-046	139°30'45"	20060605		高崎直成
集落跡/旧石器礫群1基検出						
松山遺跡第40地点	菜地1丁目1-5	112453	35°52'27"	20070202	500	宅地造成7区画
		25-010	139°31'47"	20070309		高崎直成
集落跡/奈良時代住居跡1軒、時期不明土坑14、ピット1、地下室1、溝1検出・土師器壺、須恵器坏(8世紀)						
8世紀後半の住居跡を検出、北壁中央に竈。						
松山遺跡第41地点	中ノ島1丁目2-5	112453	35°52'30"	20070207	330	宅地造成9区画
		25-010	139°31'56"	20070305		高崎直成
集落跡/中・近世溝3、土坑7検出・中世(瓦質鉢、常滑鉢、かわらけ、砥石、板磚、銭貨)						
中世末から近世初頭の道路の溝溝と思われる溝を並行して2本検出。近世初頭の新田開発との関連が注目される。						
江川南遺跡第22地点	東久保132-11	112453	35°51'49"	20061011	90	分譲住宅2棟
		30-007	139°30'42"	20061109		越村篤
集落跡/旧石器礫群5基検出・旧石器 ナイフ、剥片						
礫群は遺跡の東端、川から50mの近距離にあり、径1~2.5mの比較的小規模なもの。						
江川南遺跡第23地点	東久保1丁目121番1	112453	35°51'49"	20070124	610	分譲住宅9棟
		30-007	139°30'37"	20070316		越村篤
集落跡/旧石器礫群6基、縄文時代中期住居跡1軒、土坑2、ピット30、近世以降溝4検出・旧石器(石核、フツナ)、縄文土器(新道、阿玉台目)、縄文時代石器						
川から20mの近距離に径1~2.5mの比較的小規模な礫群、5~10mの範囲に2,3基の礫群がまぎらって分布する。1977年に第1地点として調査した勝坂I式期の住居跡のほかにも新道式期の住居跡を新たに1軒検出した。						
東久保遺跡第64地点	ふじみ野2丁目18-6の一部	112453	35°51'48"	20061012	112	共同住宅建設
		30-009	139°30'51"	20061026		越村篤
集落跡/中世~近世溝1検出						
土地境の溝を検出。						
駒林遺跡第1地点	駒林土地区画整理事業地内20街区4,8,9	112453	35°51'57"	20060713	146	共同住宅建設
		25-013	139°33'21"	20060802		笹森健一・高崎直成
集落跡/中世溝2、道路、茶毘跡2基検出						
時期不明の溝を検出。テフラ分析の結果、12世紀初頭以降であった可能性あり。溝跡の覆土中に茶毘跡が構築され検出した炭化材の年代測定の結果中世(AD1316-1606)の結果を得た。溝跡は西側で北方へ直角急曲がり、第2地点の溝に続く。一辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能。						

納林 遺跡第2地点	納林 土地区画整理事業 地内17街区7,8の一部	112453	35°52'00"	20061121	80	個人住宅建設
		25-013	139°31'32"	20061129		越村篤
	集落跡/中世溝跡検出 南北方向の溝を23m検出。幅3.5m以上の底幅の広い薬研堀で一辺150m前後の台形の方形館跡の想定も可能。					
納林 遺跡第3地点	納林 土地区画整理事業 地内21街区3,4南地	112453	35°52'02"	20061130	333	店舗建設
		25-013	139°31'36"	20061218		高崎直成
	集落跡/近世溝2、土坑3、井戸1検出・近世陶磁器 用途不明の大形土坑を検出。					
西ノ原遺跡第135地点	うれし野 1丁目226-1	112453	35°51'20"	20060314	1,160	集合住宅・店舗建設
		30-001	139°31'12"	20060619		高崎直成・越村篤
	集落跡/縄文時代中期住居跡1軒、炉穴1検出・縄文土器(加曾利E1)、縄文時代石器 加曾利E1新式の住居跡を検出。西ノ原遺跡の加曾利E1新期の集落は、南側へ偏重する傾向を見せており、183号住居跡は当該期集落の南西端に位置する。					
神明 後遺跡第28地点	苗間神明 後306-1	112453	35°51'42"	20060508	1,200	宅地造成
		30-041	139°31'43"	20061005		高崎直成・越村篤
	集落跡/縄文時代炉穴3、中期住居跡11軒、集石23、屋外炉1、屋外埋設土器3、土坑6、落し穴1、ピット9、平安時代住居跡1、中近世溝3、堀跡1検出・縄文土器(勝坂、加曾利E)、縄文時代石器、土師器灰、甕、須恵器坏(8世紀後半~9世紀) 斜面地での縄文集落。加曾利E1新期からE3期の住居跡11軒を検出した。17号と22号住居跡からは内面に文様が彩された浅鉢を検出。平安時代住居より土師器の灯火具と墨書須恵器検出。時期不明の堀跡はテフラ分析の結果、12世紀初頭以降であった可能性あり。					
神明 後遺跡第29地点	苗間神明 後303-21,24	112453	35°51'40"	20060508	52	個人住宅建設
		30-041	139°31'42"	20060519		越村篤
	集落跡/縄文時代ピット1、古代~中世溝検出・縄文土器(中期後半) 南北方向の溝は底幅の広い薬研堀で、18、26地点検出の溝と連なる。					
神明 後遺跡第30地点	苗間神明 後303-1	112453	35°51'42"	20061214	60	個人住宅建設
		30-041	139°31'42"	20061219		越村篤
	集落跡/縄文時代ピット5、近世柱穴検出・縄文土器(中期後半)					
浄 禪寺遺跡第26地点	苗間神明 後354-23,24	112453	35°51'37"	20060417	226	個人住宅建設
		30-022	139°31'51"	20060615		高崎直成・越村篤
	集落跡/縄文時代早期炉穴10、前期~後期土坑8、ピット21、近世溝1検出・縄文土器(早期、後期) 早期の炉穴を10基検出した。2~7m間隔で点在し、足場を共有するような連携同士の重なりはない。					
大井 宿遺跡第13地点	大井 1-3-32	112453	35°51'09"	20060821	60	個人住宅建設
		30-010	139°30'59"	20060824		高崎直成
	集落跡/近世土坑8、ピット63検出・近世(陶磁器、焙烙、銭貨、分銅) 川越街道大井宿の一角を調査。「天下」の刻印がある椀の分銅を検出。					
本村遺跡第117地点	大井 2-11-4,6の一部	112453	35°51'04"	20060322	1,582	店舗建設
		30-034	139°31'19"	20060414		越村篤
	集落跡/中世~近世溝2、土坑4、ピット17検出 久田神社跡地で、社地を取り囲む溝を検出。					
本村遺跡第118地点	市沢 2丁目12番13	112453	35°51'15"	20060524	80	個人住宅建設
		30-034	139°31'28"	20060525		高崎直成
	集落跡/時期不明落し穴1検出					
東 台遺跡第46地点	大井字 東台626-11	112453	35°51'02"	20060904	80	宅地造成
		30-024	139°31'33"	20060928		鍋島直久・越村篤
	集落跡/縄文時代中期住居跡2軒、土坑2、集石1検出・縄文土器(勝坂、加曾利E)、縄文時代石器 加曾利E2式期の住居で覆土内に集石土坑を検出。					
東 台遺跡第48地点	大井字 東台649-21	112453	35°51'01"	20070116	25	個人住宅建設
		30-024	139°31'30"	20070126		高崎直成
	集落跡/縄文時代中期住居跡3軒検出・縄文土器(加曾利EII) 集落内の住居密集区域で、3軒の住居跡検出。					



西遺跡第1地点試掘調査



西遺跡第1地点本調査



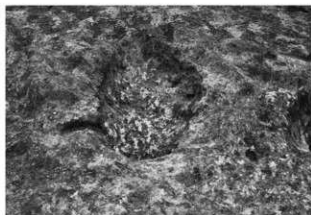
北野遺跡第1地点試掘調査



北野遺跡第2地点試掘調査



川崎遺跡第21地点H51号住居跡



川崎遺跡第21地点H51号住居遺跡



川崎遺跡第21地点溝



ハケ遺跡C区7次調査トレンチ1



ハケ遺跡C区7次調査トレンチ3



滝遺跡第12地点試掘調査



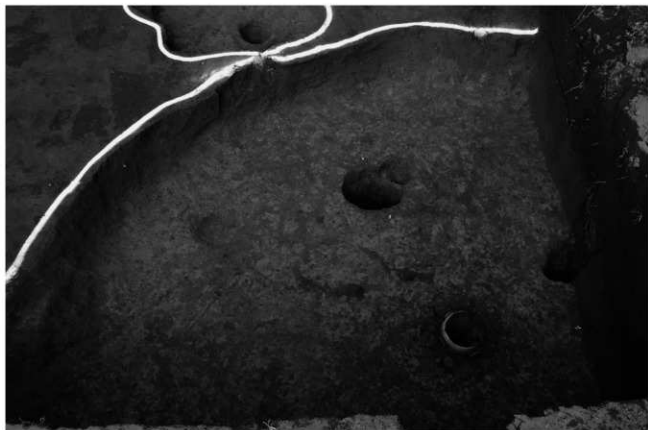
長宮遺跡第25地点試掘調査



長宮遺跡第25地点ピット1～3



長宮遺跡第26地点試掘調査



亀居遺跡第61地点16号住居跡



亀居遺跡第61地点16号住居跡炉



亀居遺跡第61地点16号住居跡炉出土状況



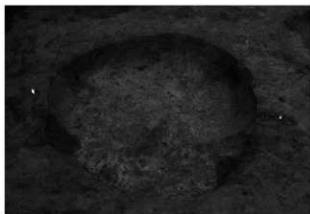
亀居遺跡第61地点16号住居跡遺物出土状況



亀居遺跡第61地点集石1



亀居遺跡第61地点集石2



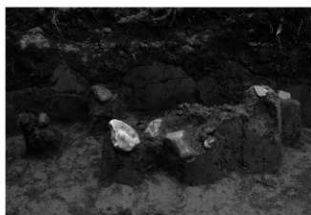
亀居遺跡第61地点土坑1



亀居遺跡第61地点試掘調査



亀居遺跡第61地点木調査



鶴ヶ舞遺跡第10地点礎群



鶴ヶ舞遺跡第10地点溝



鶴ヶ舞遺跡第11地点試掘調査



鶴ヶ舞遺跡第11地点トレンチ



松山遺跡第25地点H20号住居跡



松山遺跡第25地点H21号住居跡



松山遺跡第37地点試掘調査



松山遺跡第38地点試掘調査



松山遺跡第39地点試掘調査



松山遺跡第40地点試掘調査



松山遺跡第41地点試掘調査



松山遺跡第42地点試掘調査



江川南遺跡第21地点試掘調査



江川南遺跡第22地点試掘調査



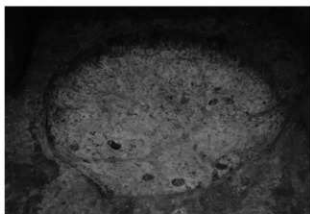
江川南遺跡第23地点試掘調査



江川東遺跡第11地点試掘調査トレンチ3、4



江川東遺跡第11地点試掘調査トレンチ3、4



江川東遺跡第11地点土坑1



江川東遺跡第11地点土坑2



江川東遺跡第12地点試掘調査



江川東第13地点試掘調査



東久保遺跡第64地点試掘調査



東久保西遺跡第17地点試掘調査



東久保西遺跡第18地点試掘調査



東中学校西遺跡第28地点試掘調査



東中学校西遺跡第29地点試掘調査（西側）



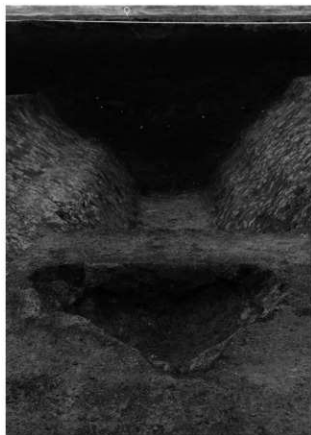
東中学校西遺跡第29地点土坑 1、2



東中学校西遺跡第30地点試掘調査



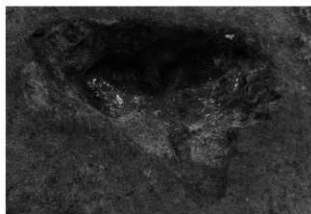
駒林遺跡第1地点溝1



駒林遺跡第1地点溝1土層・茶毘跡2



駒林遺跡第1地点茶毘跡1



駒林遺跡第1地点茶毘跡2



駒林遺跡第1地点溝1内硬化面



駒林遺跡第1地点溝1内出土馬菌



胸林遺跡第2地点試掘調査全景



胸林遺跡第2地点溝1



溝2



溝3



胸林遺跡第3地点土坑1



胸林遺跡第3地点土坑1



胸林遺跡第3地点土坑2



胸林遺跡第3地点土坑3



胸林遺跡第3地点井戸1



胸林遺跡第3地点溝1



胸林遺跡第3地点溝2



胸林遺跡第3地点試掘調査



西ノ原遺跡第136地点試掘調査



西ノ原遺跡第137地点試掘調査



西ノ原遺跡第138地点試掘調査



西ノ原遺跡第139地点試掘調査



神明後遺跡第28地点試掘調査



神明後遺跡第29地点試掘調査全景



神明後遺跡第29地点溝1



神明後遺跡第30地点トレンチ4



浄禪寺遺跡第26地点本調査全景西側



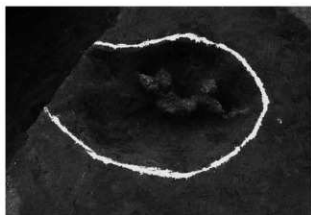
浄禪寺遺跡第26地点本調査全景東側



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 1



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 2



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 3



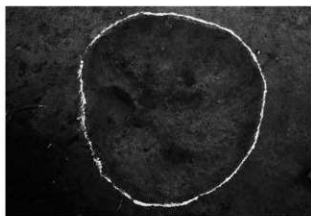
淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 4



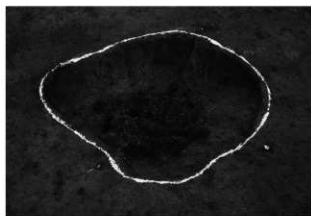
淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 5



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 6



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 7



淨禪寺跡遺跡第26地点炉穴 8



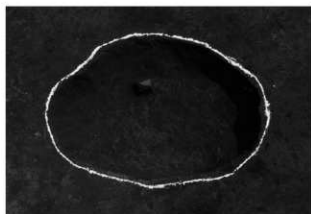
浄禪寺跡遺跡第26地点坑9



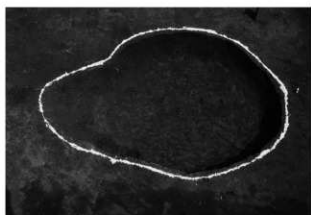
浄禪寺跡遺跡第26地点坑10



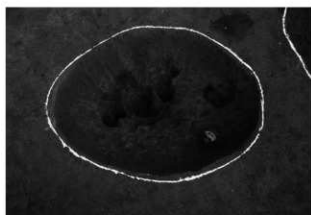
浄禪寺跡遺跡第26地点土坑1



浄禪寺跡遺跡第26地点土坑2



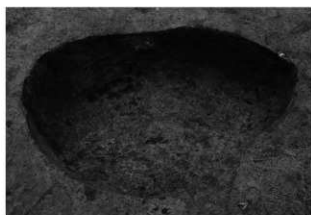
浄禪寺跡遺跡第26地点土坑3



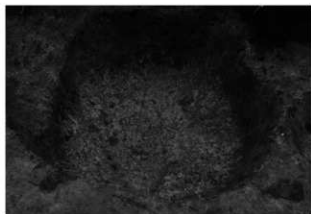
浄禪寺跡遺跡第26地点土坑4



浄禪寺跡遺跡第26地点土坑5



浄禪寺跡遺跡第26地点土坑6



浄禪寺跡遺跡第26地点土坑7



浄禪寺跡遺跡第26地点土坑8



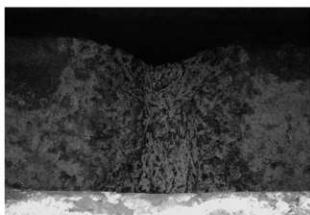
浄禪寺跡遺跡第26地点溝1



浄禪寺跡遺跡第26地点溝1



浄禪寺跡遺跡第28地点試掘調査トレンチ



浄禪寺跡遺跡第28地点溝1



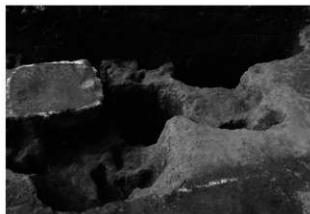
大井宿遺跡第12地点試掘調査



大井宿遺跡第13地点本調査



大井宿遺跡第13地点本調査土坑2～4



大井宿遺跡第13地点本調査土坑5～8



大井宿遺跡第14地点試掘調査



大井氏館跡遺跡第21地点試掘調査



本村遺跡第117地点試掘調査全景



本村遺跡第117地点北側



本村遺跡第117地点南側



本村遺跡第117地点溝1トレンチ1～3



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ4～5



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ6



本村遺跡第117地点トレンチ6～9、15



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ10



本村遺跡第117地点溝1 トレンチ13



本村遺跡第117地点柵列



本村遺跡第117地点溝1 柵列



本村遺跡第118地点落し穴



大井戸上遺跡第5地点試掘調査



東台遺跡第45地点試掘調査



東台遺跡第45地点遺跡見学会



東台遺跡第46地点試掘調査遺構確認作業



東台遺跡第47地点試掘調査



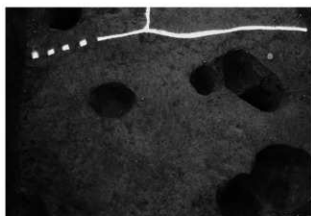
東台遺跡第48地点99号住居跡



東台遺跡第48地点100号住居跡



東台遺跡第48地点99、100、170号住居跡



東台遺跡第48地点170号住居跡



東台遺跡第48地点作業風景



遺物洗浄



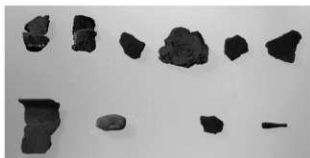
注記作業



川崎遺跡第21地点H27号居住跡 No. 7



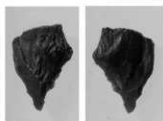
川崎遺跡第21地点H27号居住跡 No. 8 遺構外 No. 12



長宮遺跡第25地点 No. 15・16

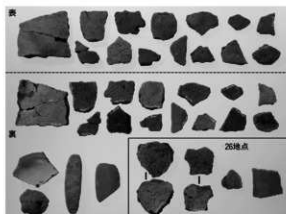


長宮遺跡第25地点 No. 17

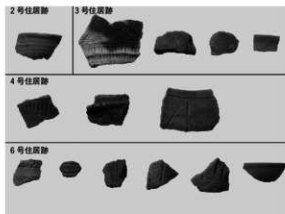


長宮遺跡
第25地点
No. 22

長宮遺跡
第25地点
裏
No. 22



長宮遺跡 第25・26地点 出土遺物



ハケ遺跡 C区7次調査2・3・4号住居出土土器



ハケ遺跡 C区7次調査5号住居出土土器



ハケ遺跡 C区7次調査6号住居・遺構外出土遺物



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.1



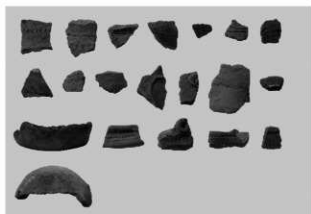
亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.1



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.2・3



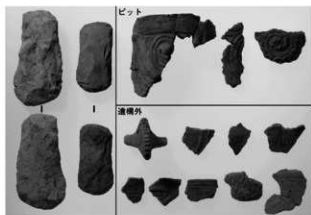
亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.4~18



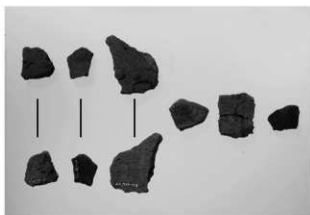
亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.19~37



亀居遺跡第61地点16号住居跡 出土土器 No.38~59



亀居遺跡第61地点16号住居跡 No.60,61・ピット1~3・遺構外1~9



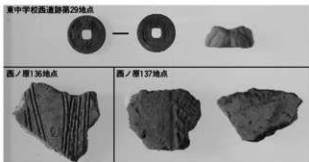
松山遺跡第39地点 出土土器 1~6



江川東遺跡第11地点出土石器 江川東遺跡第11地点出土石器表



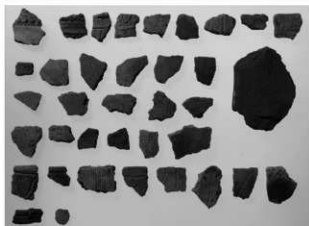
胸林遺跡第3地点 出土遺物



東中西遺跡第29地点・西ノ原遺跡136・137地点出土遺物



神明後遺跡第29・30地点 出土遺物



浄禪寺遺跡第26地点 出土遺物



本村遺跡 第117地点出土遺物



大井宿遺跡 第13・14地点出土遺物



大井宿13 P50 分銅 大井宿13 P50 分銅



東台遺跡 第48地点 出土土器 NO.1~16



大井宿遺跡第13地点
出土遺物 土坑2 No.1



大井宿遺跡第13地点
出土遺物 P50No.11



大井宿遺跡第13地点出土遺物 土坑2 No.2



大井宿遺跡
第13地点錢貨



大井宿遺跡
第13地点錢貨 裏



大井宿遺跡 第14地点出土遺物



東台遺跡 第48地点 出土土器



松山遺跡第40地点全景



松山遺跡第40地点H33号住居